

# 上月隈 B 遺跡

—一般県道水城下臼井線関係埋蔵文化財発掘調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第742集

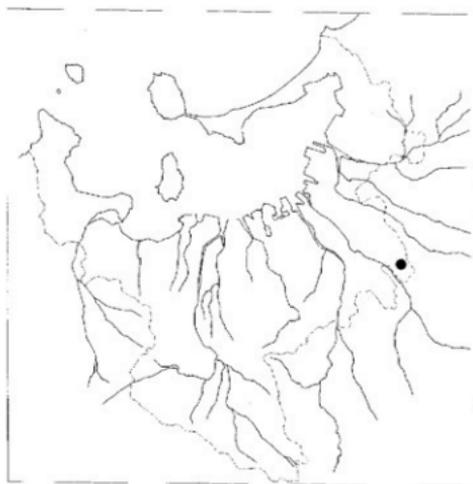
2003

福岡市教育委員会

# 上月隈 B 遺跡

—一般県道水城下白井線関係埋蔵文化財発掘調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 742 集



遺跡略号 KTH - 1

遺跡調査番号 0125

2003

福岡市教育委員会

## 序

現在、福岡市はより活力のある住みやすいまちづくりの一環として、新たな交通体系の整備を進めています。本市の東を画する月隈丘陵も、福岡空港線・一般県道水城下白井線の開通に伴う開発が行われていますが、ここは弥生時代から人々が生活し、多くの遺跡が残されているところです。

本書は、一般県道水城下白井線道路改良工事に先立って行われた上月隈B遺跡第1次調査を報告するものです。調査の結果、弥生時代から中世に至る遺構、遺物が発見され、当時の生活を復元する上で多大な成果を挙げる事ができました。

最後になりましたが、発掘調査から整理、報告に至るまで、本市土木局道路建設部東部建設第2課をはじめとする関係者の方々及び地元の方々には多大なご理解とご協力をいただきました。ここに感謝の意を表するとともに、本書を文化財保護や普及、教育などに活用していただければ幸甚に存じます。

平成 15 年 3 月 31 日

福岡市教育委員会

教育長 生田 征生

## 例 言

1. 本書は福岡市博多区月隈6丁目地内における都市計画道路一般県道水城下白井線道路改良工事に先立ち、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成13年9月1日から平成14年2月8日にかけて発掘調査を実施した上月隈B遺跡第1次調査の報告である。
2. 検出した遺構については、溝はSD、上坑はSK、ピットはSPとし、ピット以外は一括して通し番号を付した。
3. 本書に掲載した遺構の実測は担当の井上満了の他、吹春憲治、桑原美津子が、写真撮影、製図は井上が行った。
4. 本書に掲載した遺物の実測は井上が、拓影は山口とし子が、製図、写真撮影は井上が行った。
5. 本書の執筆、編集は井上が行った。
6. 本調査の出土遺物、記録類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理されるので活用されたい。

遺跡調査番号	0125	遺跡略号	KIH-1
調査地地番	福岡市博多区月隈6丁目地内		
開発面積	対象面積	調査面積	1,066m <sup>2</sup>
調査期間	2001年9月1日～2002年2月8日	分布地図番号	金隈11

# 目 次

## 本文目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査体制	1
II. 遺跡の立地と環境	
1. 遺跡の立地	2
2. 周辺の遺跡群	2
III. 調査の記録	
1. 調査地点の位置	6
2. 調査の概要	6
3. I区の調査	6
4. II区の調査	8
①調査の概要	8
②各調査面の概要	10
③遺構と遺物	17
a. 溝	17
b. 井戸	17
c. 貯蔵穴	25
d. 土坑	28
e. ビット	33
f. 包含層出土の遺物	36
g. その他の出土遺物	37
5. 小結	38

## 挿図目次

第1図	周辺の遺跡 (1/25,000)	3
第2図	調査地点と周辺の遺跡 (1/4,000)	4
第3図	調査地点の位置 (1/1,000)	5
第4図	I区遺構平面図 (1/100)	7
第5図	I区溝実測図 (1/60)	7
第6図	包含層部分土層断面図 (1/50)	9
第7図	調査区西壁土層図 (1/50)	9
第8図	土層模式図	10
第9図	II区第2面遺構平面図 (1/100)	10
第10図	II区第1面遺構平面図 (1/100)	11
第11図	II区第3面遺構平面図 (1/100)	12
第12図	II区第4面遺構平面図 (1/100)	12
第13図	II区第5面遺構平面図 (1/100)	13
第14図	第1面地形図	15
第15図	第2面地形図	15
第16図	第4面地形図	16
第17図	第5面地形図	16
第18図	SD20 実測図 (1/50)	18
第19図	SD20 出土遺物実測図1 (1/3)	19
第20図	SD20 内大甕実測図 (1/20)	19
第21図	SD20 出土大甕実測図 (1/8)	20
第22図	SD20 出土遺物実測図2 (2/3, 1/4)	21
第23図	SE76 実測図 (1/60)	23
第24図	井戸様板材計測部位	24
第25図	SE76 出土遺物実測図 (1/3)	25
第26図	SE76 出土遺物実測図 (1/4, 1/6)	26
第27図	貯蔵穴実測図 (1/40)、出土遺物実測図 (1/4)	27
第28図	土坑実測図1 (1/40, 1/80)	29
第29図	土坑実測図2 (1/40)	30
第30図	土坑出土遺物実測図 (1/3, 1/4, 1/2)	31

第31図	ビット実測図 (1/40,1/20)	33
第32図	ビット出土遺物実測図 (1/3,1/2)	34
第33図	ビット出土石器実測図 (2/3)	35
第34図	包含層出土遺物実測図 (1/4,2/3)	37
第35図	その他出土遺物実測図 (1/3,1/4,1/2)	38

表目次

表 1	SE76 井戸補計測表	24
-----	-------------	----

図版目次

図版 1	1. I 区全景 (北から)	2. SD01・SD09・SD08 (北から)
図版 2	1. SD01 (東から)	2. SD09 (北から)
図版 3	1. II 区南側第 1 面 (西から)	2. II 区北側第 2 面 (西から)
図版 4	1. II 区全景 (南から)	2. II 区北側全景 (南から)
図版 5	1. II 区北側包含層第 1 面 (西から)	2. II 区北側包含層第 2 面 (西から)
図版 6	1. II 区北側包含層第 3 面 (西から)	2. II 区第 2 面 (南東から)
図版 7	1. II 区第 3 面 (北西から)	2. II 区第 4 面 (南東から)
	3. II 区第 5 面南側 (北西から)	
図版 8	1. II 区第 5 面 (西から)	2. II 区地山面全景 (西から)
図版 9	1. 調査区東壁土層 (南西から)	2. SK03・SK54・SE76 付近 (南西から)
	3. SK54 付近東壁トレンチ土層 (西から)	
図版 10	1. 包含層土層断面 (南東から)	2. 包含層土層断面 (南から)
	3. 西壁土層断面 (東から)	
図版 11	1. SD20 大礎出土状況 (北から)	2. SD20 大礎出土状況 (西から)
	3. SD20 大礎取り上げ後 (西から)	
図版 12	1. SD20 発掘状況 (北から)	2. SD20 北壁土層断面 (南から)
図版 13	1. SD20 A-A' 土層断面 (北から)	2. SD20B-B' 土層断面 (南から)
	3. SD20 C-C' 土層断面 (南東から)	
図版 14	1. SE76 俯瞰 (西上空から)	2. SE76 上層井筒検出状況 (北から)
	3. SE76 上層井筒掘り下げ状況 (西から)	
図版 15	1. SE76 下層井筒検出状況 (南西から)	2. SE76 下層井筒 (西から)
	3. SE76 井筒半截状況 (北から)	
図版 16	1. SE76 井筒断面 (北から)	2. SE76 木器出土状況 (南から)
	3. SE76 井筒取り上げ後 (北から)	
図版 17	1. SU08 (東から)	2. SU60 土層断面 (南東から)
	3. SU60 (東から)	
図版 18	1. SU44 土層断面 (北から)	2. SU44 遺物出土状況 (北東から)
	3. SU44 発掘状況 (北から)	
図版 19	1. SK54 土層断面 (北から)	2. SK54 (南東から)
	3. SK39 (南から)	
図版 20	1. SK82 土層断面 (北西から)	2. SK99 遺物出土状況 (南東から)
	3. SP64 (南から)	
図版 21	1. SP354 (東から)	2. SP339 (西から)
	3. 石岸出土状況 (北から)	
図版 22	出土遺物実測図 1	
図版 23	出土遺物実測図 2	
図版 24	出土遺物実測図 3	
図版 25	出土遺物実測図 4	
図版 26	出土遺物実測図 5	
図版 27	出土遺物実測図 6	
図版 28	出土遺物実測図 7	
図版 29	出土遺物実測図 8	
図版 30	出土遺物実測図 9	
図版 31	出土遺物実測図 10	

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経過

2000年10月2日に福岡市土木局道路建設部東部建設第2課より、一般県道水城下口井線道路改良工事に先立ち、福岡市博多区月隈6丁目地内における埋蔵文化財の有無について事前審査申請が提出された。申請地は月隈C遺跡群の隣接地であることから、事業計画に基づきつつ埋蔵文化財課で敷地内における試掘調査を行った。その結果、月隈6丁目9番地内では現地表下約2mの暗褐色粘質土上面で、月隈6丁目8番地内においては現地表下約50cmの黄褐色土（花崗岩バイラン土）上面で遺構が検出された。この成果をもとに協議を行い、工事が行われる範囲内においてはやむを得ず発掘調査を行い、記録保存を図ることとした。また、土木局道路建設部道路建設第2課との間に発掘調査及び資料整理に関する受託契約を締結した。発掘調査は2001年9月1日～2002年2月8日の間に行った。

## 2. 調査体制

調査委託	福岡市土木局道路建設部東部建設第2課
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 生田征生
調査総括	埋蔵文化財課長 山崎純男 調査第2係長 力武卓治(前) 田中壽夫(現)
調査庶務	文化財整備課 御手洗清
事前審査	濹本正志
調査担当	試掘調査 濹本正志 発掘調査 井上蘭子
調査作業	石川洋子 泉木タミ子 伊藤美伸 乾俊夫 大賀規矩雄 桑原美津子 志堂寺堂 柴田博 田中トミ子 鍋山治子 濱地静子 林厚子 播磨千恵子 平井武夫 吹春憲治 藤原直子 北條こず江 水野由美子 森本良樹
整理作業	川田京子 日下部由美子 桑野綾子 坂井かおり 佐々木涼子 橋本麻里 福岡由衣子 牧野ミワ 山口とし子

このほか、発掘調査に至るまでの条件整備、調査中の調整等について福岡市土木局道路建設部東部建設第2課の皆様には多大なご理解とご協力をいただきました。ここに深く感謝いたします。

## Ⅱ. 遺跡の立地と環境

### 1. 遺跡の立地

福岡平野は、東から南にかけて背振、三郡山塊に囲まれ、北は博多湾に面し、南北に延びる丘陵と沖積平野を交互に連ねて形成される。その沖積平野を、西から宍見川、樋井川、那珂川、御笠川、宇美（多々良）川が貫流し、それぞれの河川により開析された丘陵や段丘によって画された小平野が形成される。ここでいう狭義の福岡平野とは、御笠川、那珂川流域の旧麻田郡の一部、那珂郡、御笠郡に当たる部分で、この福岡平野を中心として周辺に重要な遺跡群が点在する。

上月隈B遺跡群が立地する月隈丘陵は福岡平野の東を画するように延びる。この丘陵は四王寺山から派生し、開析を多く受けた地形を呈し、舌状丘陵や独立丘陵が多く広がっている。これらの丘陵上には弥生時代を中心とする墓地や集落、古墳群が分布する。

上月隈B遺跡群は、この月隈丘陵から西へ多数派生する舌状の支丘の一つに位置する。同じ丘陵上や西側沖積地には多数の遺跡が分布している。

### 2. 周辺の遺跡群

上月隈B遺跡群の北側には上月隈遺跡が位置する。甕棺墓や土槨墓によって構成される墳墓群、弥生時代の集落、中世前半の瓦器碗焼成窯、中世後半の山城堀切が検出されている。とくに、第3次調査では、綾杉状研ぎ分けと刃部面取りが行われている中細形銅剣とガラス製管玉が副葬された成人男性の甕棺が検出され、注目される。その北側の谷を隔てた丘陵尾根上に立地する下月隈B遺跡は、上月隈遺跡第3次調査地点と同じ時期の、弥生時代中期後半の甕棺墓と土槨墓の墳墓群が検出されている。さらにその北側の谷を隔てた丘陵に位置する天神森遺跡では、土槨墓群が検出されている。このように、上月隈B遺跡群の北側丘陵には、弥生時代墳墓群が広がっている様相が伺える。また、それらの約1km北側に位置する遺跡として、異体字銘帯鏡や鉄製品、ガラス製小玉が副葬された土槨墓が検出された宝満尾遺跡、横帯文銅鐸型型が出土した赤穂ノ浦遺跡、弥生時代中期後半の大型掘立柱建物が発見された久保園遺跡、石製銅戈鋳型模造品が出土した席田大谷遺跡、また、古墳群として宝満尾古墳、麻田大谷古墳、丸尾古墳が挙げられる。

南に目を転じると、立花寺遺跡群が立地する。古代の倉庫群や初期輸入磁器や瓦が出土しており、官衙の存在が推定される。さらにその南に位置する金隈遺跡は、弥生時代前期後半～後期に至る大規模な共同集落地であり、甕棺墓348基、土槨墓119基が検出されている。

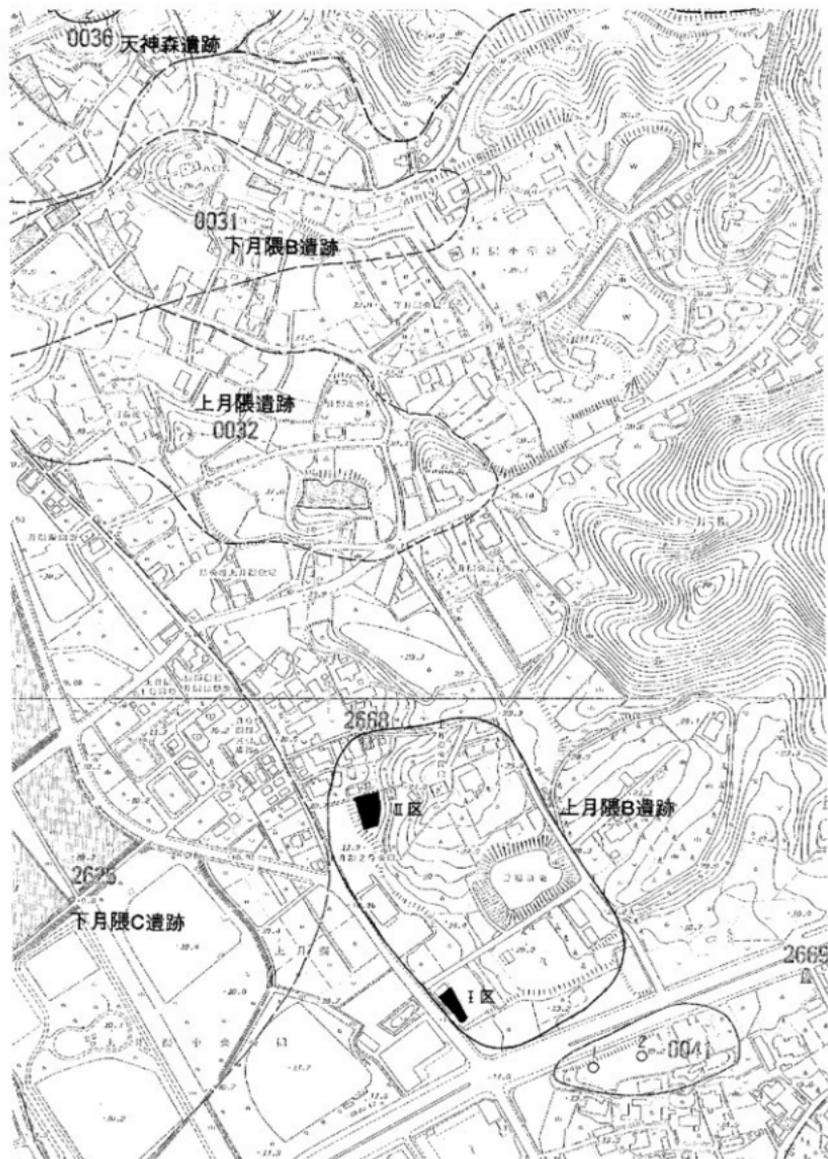
丘陵から、西の沖積地に目を向けると、上月隈B遺跡と接して下月隈C遺跡が立地する。弥生時代から中世に至る集落や、大規模な水田址、それに伴う水利施設が検出されており、現在でも調査、整理が進んでいる。その南には立花寺B遺跡群が位置している。古代～中世にかけての集落や土槨墓、越州窯系青磁や緑釉陶器などが出土しており、官衙施設の可能性が伺える。また、古墳時代中期末～後期初頭の大規模な集落が検出されている。この他、福岡空港内に分布する雀居遺跡では、縄文時代晩期から古墳時代に至る大規模な集落跡、弥生時代～中世の水田址等が検出され、縄文時代晩期終末期の本製農具・工具のセット、小銅鐸の鑄造に使用中子、祭祀用の組合式案や刷技式案、埴甲や漆塗木製品、馬鐙が出土している。

このように、上月隈B遺跡の周辺には、様々な遺跡が分布し、これらの遺跡との関連性を検討していく必要がある。

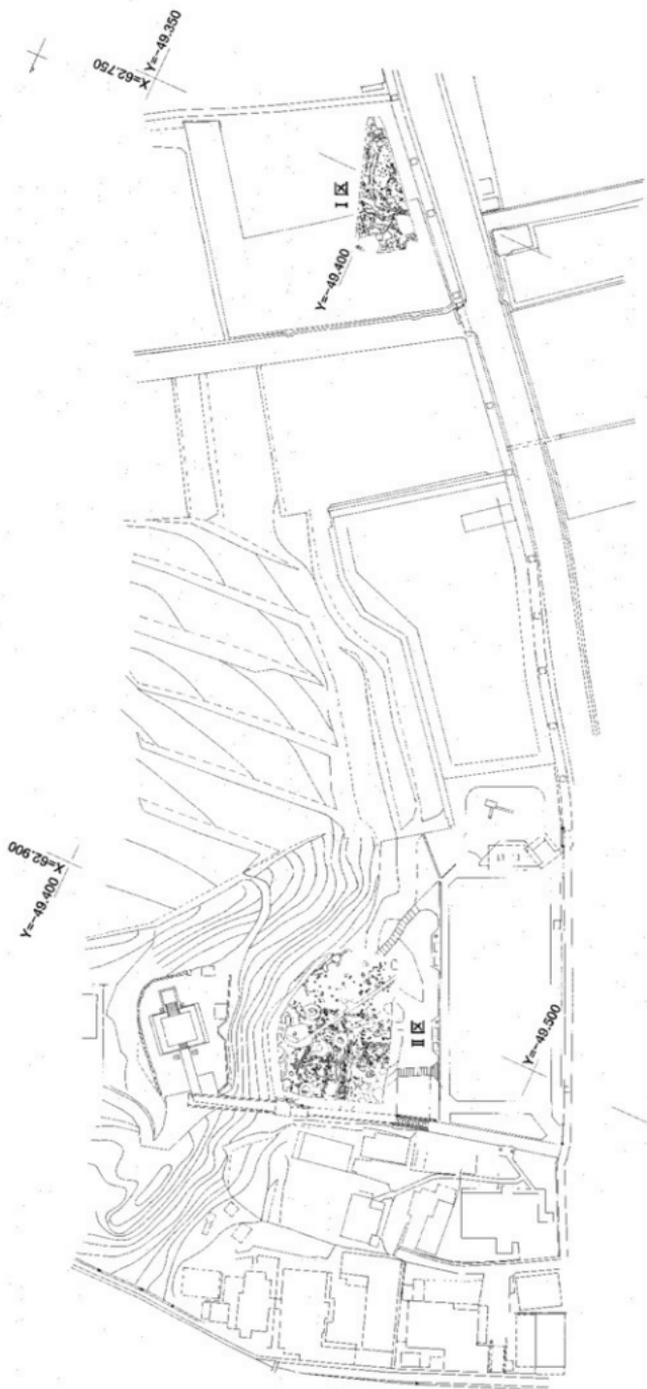


- |           |          |            |           |
|-----------|----------|------------|-----------|
| 1 上月隈遺跡   | 7 丸尾古墳群  | 13 影ヶ浦遺跡群  | 18 立花寺B遺跡 |
| 2 原山青木遺跡  | 8 天神森遺跡  | (影ヶ浦古墳群)   | 19 邪阿君体遺跡 |
| 3 久保園遺跡   | 9 下月隈B遺跡 | 14 堤ヶ浦古墳群  | 20 板付遺跡   |
| 4 原田大谷遺跡  | 10 上月隈遺跡 | 15 狩川ヶ浦古墳群 | 21 麦野遺跡   |
| 5 宝満尾遺跡   | 11 立花寺遺跡 | 16 雀居遺跡    | 22 井尻遺跡   |
| 6 原田大谷古墳群 | 12 金隈遺跡  | 17 下月隈C遺跡  |           |

第1図 周辺の遺跡 (1/25,000)



第2図 調査地点と周辺の遺跡 (1/4,000)



第3図 調査地点の位置 (1/1,000)

### Ⅲ. 調査の記録

#### 1. 調査地点の位置

上月隈B遺跡群は、道路を挟んで下月隈C遺跡の東側に接している。遺跡群は月隈丘陵から派生した小丘陵上に位置するが、この小丘陵は独立丘陵を呈し、今回新たにこの丘陵の範囲を上月隈B遺跡群として設定することになった。

今回の調査は、Ⅰ区とⅡ区との2カ所の調査区を設置して行った。Ⅰ区は、上月隈B遺跡の南端、丘陵の裾部下の沖積地上に位置する。現地表下約2m、標高10mの暗褐色粘質土上面が遺構面となる。Ⅱ区は、遺跡東寄りの丘陵中腹の平坦面に位置する。現地表下約50cm、標高約13～15mの花崗岩バイラン土上面が遺構面となる。

#### 2. 調査の概要

調査はⅠ区、Ⅱ区の順で行った。まず、Ⅰ区の表土剥ぎから開始したが、遺構面まで深く、残土が敷地内に置けないために、約400m離れた道路建設予定地内に土砂を搬出しながらの掘削となった。Ⅰ区では、現地表下約2mで遺構面が検出され、遺構検出、遺構掘削を行いながら、1/100による周辺測量、1/20による遺構平面図作成、写真撮影を行い、調査を終了した。Ⅱ区では、当初残土置場が確保できなかったため、まず、北側半分から表土を掘削し、調査を開始した。1/100による周辺測量、1/10、1/20による遺構実測、遺構平面図作成、写真撮影を行い、通りの調査をすませた。その後、北側半分の残土と南側半分の表土は敷地外南側に置場を確保できたために、北側を埋め戻さずにそのまま南側半分に広げ調査に移行した。調査区の中央西側寄りには、本来地山である花崗岩バイラン土が急激に落ち、その上部に包含層が堆積していることが判明し、包含層堆積部分に関しては、1面ずつ遺構検出、遺構掘削、図面作成、写真撮影の作業を繰り返しながら掘り下げていった。調査終了間際には、遺構面全体をバックホーで掘り下げ、遺構検出の再確認を行い、残りの遺構掘削と図面作成、写真撮影をすませ、後片付けを行い、2002年2月8日には撤収を行い、調査を終了した。

#### 3. Ⅰ区の調査

Ⅰ区では溝、ピット等が検出されたが、遺構の残存状況は悪く、本来の遺構面はかなり削平されていると思われる。また、出土遺物はほとんどなく、遺構全体の時期や性格は不明確であった。ここではいくつかの遺構について述べる。

##### SD01 (第5図)

調査区南端付近に位置する。N-81.7°-Eの方位で走る。幅0.85～1.40m、深さ10～20cmである。出土遺物はない。

##### SD09 (第5図)

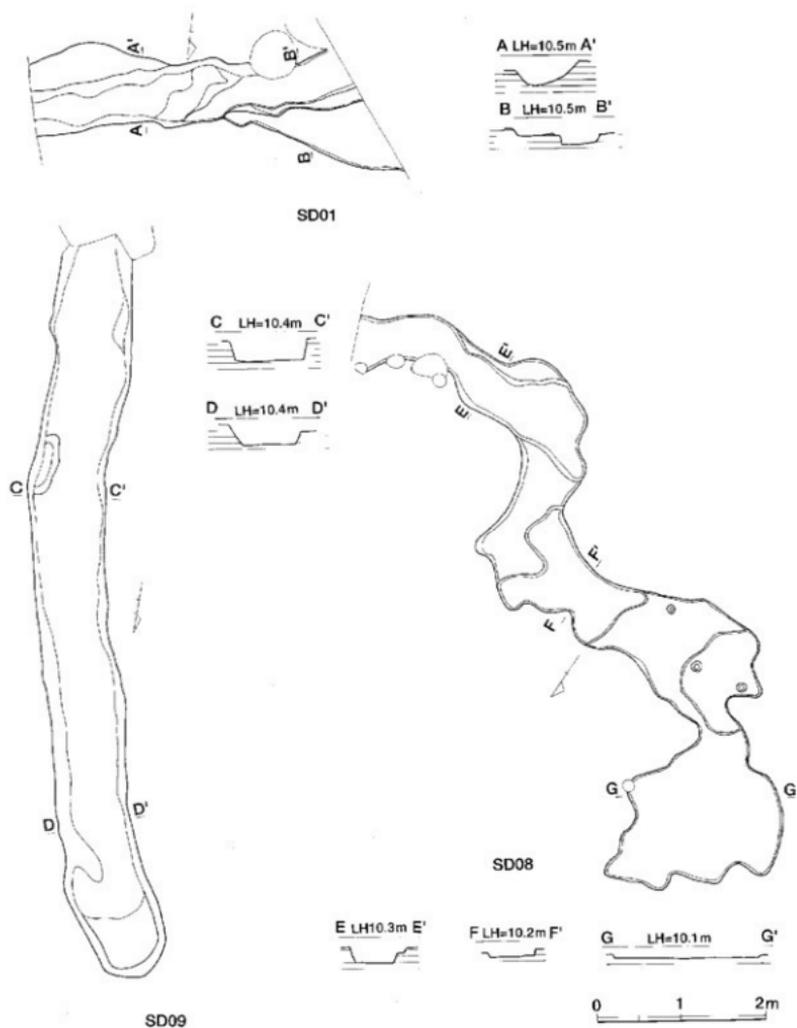
調査区南寄りから中央に位置する。ほぼ北から南の方向へ走る。溝の北端は途切れているが、削平によるものか本来の形状であるのかは判然としない。幅80～90cm、深さ20～25cmを測る。断面は台形で整った形状を呈する溝である。出土遺物は小片のみである。

##### SD08 (第5図)

調査区北寄りに位置する。おおよそ東-西の方向で走るが、不定形で方向も一定していない。粗砂



第4图 I区遗構平面图 (1/100)



第5图 I区溝実測図 (1/60)

が堆積しており、溝というよりは河川状のものであった可能性もある。出土遺物はほとんどない。

その他、ピットが比較的多く検出されているが、建物を形成する柱穴は検出されなかった。また、出土遺物も細片のみで時期を決定できるものはあまり無かった。ただ、SD09のように比較的しっかりした溝も検出されており、本調査区が集落の一端であることは推定できる。周辺の調査に期待したい。

## 4. II区の調査

### ①調査の概要

II区は、現在上月隈公民館が建っている丘陵頂部から西へ下った麓付近のテラス状平坦地に位置する。公民館と調査区の間にはやはりテラス状になった平坦地があり、そこには地録神社が祀られている。調査区の立地する平坦地は、若干の削平は受けていると思われるが、本来そのような平坦面を呈していたと推定される。調査区の北西コーナー付近は急激に地形が落ちるが、これは最近の人工的な削平によるものである。当初調査区の北側約2/3の遺構面を広げたところ、南西部付近で黒褐色粘質土及び灰褐色土が堆積しているのが確認された。これは北西部には見られなかったが、明らかに削平を受けたため、本来は調査区の西側全面に堆積していたものと考えられた。そこで、北側では包含層上面及び花崗岩パイラン土上面を、その時点では第1面として調査した。東側地山面では、多数の柱穴と土坑、また、地形の変換点付近ではほぼ南北の方向に走る溝、北西部では貯蔵穴などが検出された。また、東側では、いくつかの遺構が切り合っている地点があり、状況が不明瞭であったため、トレンチを入れて断面を見たところ、2m以上の深さになり大型の井戸になるのではないかと推定された。そこで、この部分の調査はいったん打ち切り、他の範囲の調査を先に行ったのちに着手することとした。

その頃、残り南側部分の廃土を敷地外におくことが可能となったため、北側第1面の調査を終えた時点で、南側半分の表土を掘削して調査区全面の遺構面を広げた。その結果予想通り、黒褐色粘質土・灰褐色土上の包含層が、調査区西側に堆積していることが明らかになった。つまり地山平坦面が西側で傾斜し、低い部分に包含層が堆積して地山と包含層とで遺構の乗る平坦面を形成しているのである。そこで、この包含層部分の堆積状況を検討するために、調査区西側中央付近に、東西方向にトレンチを入れて土層を見てみた(第6図)。調査区西側壁際付近で最も厚く堆積しており、地山面まで約80cmの深さとなった。この土層状況をもとに、包含層を分層して面を設定することにした。

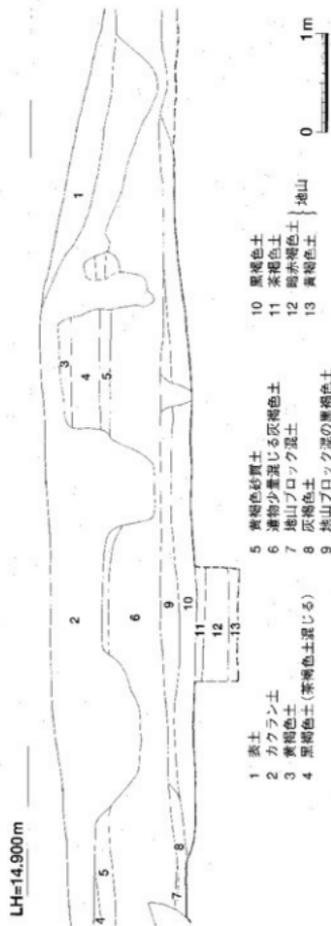
方、南側では、この地山と黒褐色粘質土包含層の平坦面上に黄褐色土が約10cmの厚さで堆積しており、この上面から遺構が切り込んでいた。そこで、南側においては、この黄褐色土上面を第1面として新たに設定し直し、以下地山と黒褐色粘質土・灰褐色土包含層を第2面以下として調査していくことにした。1、2-C区の範囲である。第1面では、ピット、土坑などが検出されている。

南側第1面を調査し、第1面である黄褐色土を除去したところ、東側半分では地山である花崗岩パイラン土、西側では包含層の黒褐色粘質土・灰褐色土が検出された。この面を第2面とした。この面は北側の第1面とつながる。ピット、土坑が検出されている。

第3面は、2-B、C区の範囲で、包含層が堆積している部分である。土層断面では、黒褐色粘質土層・灰褐色土層を除去した灰茶褐色土層上面が第3面となるのであるが、遺構検出が非常に困難であり、灰茶褐色粘土層を除去した面を第3面に設定して調査した。この面は、遺構の切り合いが非常に激しいこと、また、時期の異なる遺構が確認されたことから、時期の新しい遺構群を第3面、時期の古い遺構群を第4面として調査することにした。第3面における遺構の掘削、記録をすませたのちに第4面としての遺構の調査を行った。第3面においては、柱穴、ピット、第4面は溝状遺構などが



第6図 包含層部分土層断面図 (1/50)



第7図 調査区西端土層図 (1/50)

検出された。

第5面は、第3、4面の層を除去したのちに検出した。最下面の地山である。2-B、C区の範囲である。土坑、ピットなどが検出されている。

各面の調査を行いながら、1-A～C区部分の花崗岩バイラン上地山面をバックホーで掘り下げ遺構検出のため押しを行った。同時に調査区東側に位置している井戸と思われる遺構の掘り下げを行った。その途中で井筒が検出され、井戸として掘り下げた。井戸の堀方は径5.2～5.7mを測り、深さも5mを超え、危険になったために途中で掘り下げを断念した。

## ②各調査面の概要

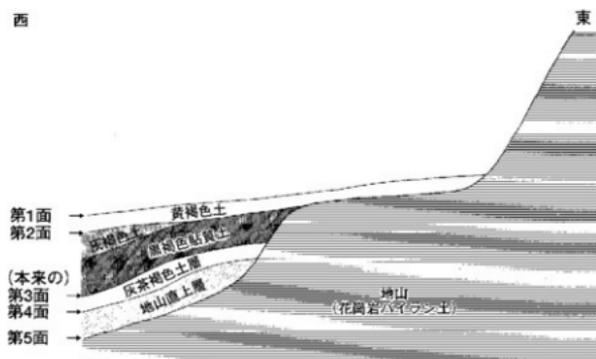
### 第1面 (第10図)

調査区南半分、1、2-C区部分である。標高13.4m～15.2mを測る。花崗岩バイラン土の地山の上面に堆積している黄褐色土層上面である。この黄褐色土は調査区の北側には堆積していなかったが、本来は全面に広がっていたと考えられる。土坑やピットが分布しているが、削平を受けていると思われるため遺構の残りは浅い。柱穴らしいものも分布しているが、建物としては検出できなかった。出土遺物も全体的に少ないが、弥生時代の遺物の他、須恵器、土師器、白磁の細片が出土しており、弥生時代～中世に至る遺構が分布している。

### 第2面 (第9図)

調査区全面である。調査区の東側は花崗岩バイラン土の地山が露呈し、西側は地形が落ちた部分に包含層が堆積しており、その上面に遺構が掘り込まれる。標高は13.4～15.2mを測る。

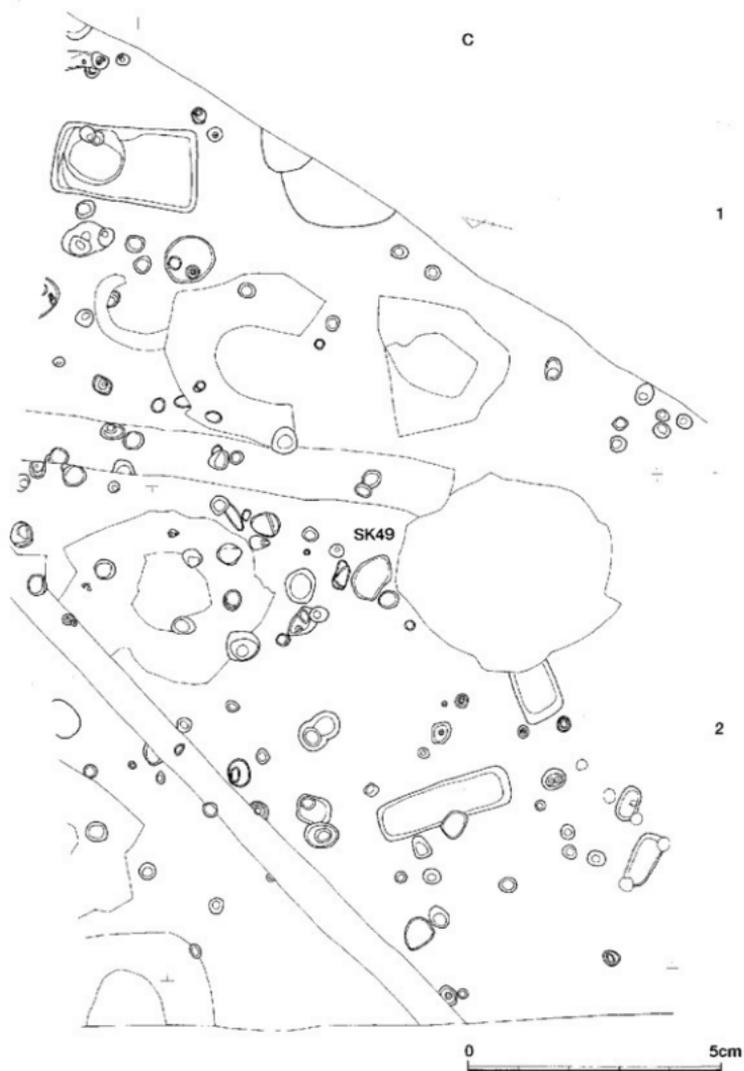
遺構は多く検出されている。東壁際付近に弥生時代の貯蔵穴(SU08)、中世の井戸(SE76)が分布する。それぞれの切り合いが激しいのと、壁際での検出であったため、遺構の検出は困難であった。



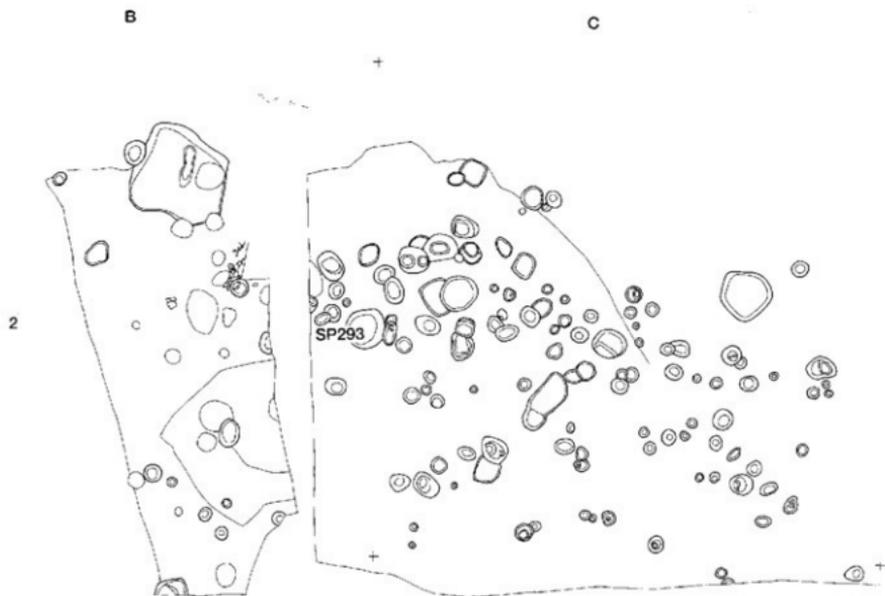
第8図 土層模式図



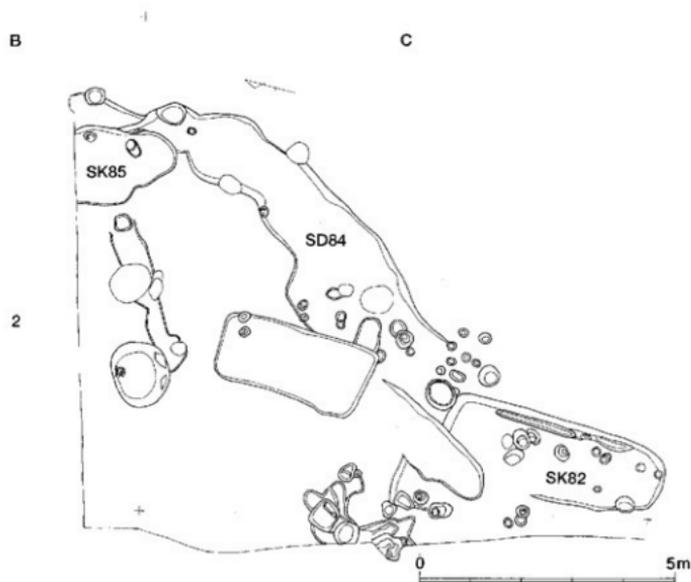
第9图 I区第2面遺構平面図 (1/100)



第10图 II区第1面遺構平面図(1/100)



第 11 图 II 区第 3 面遺構平面图 (1/100)



第 12 图 II 区第 4 面遺構平面图 (1/100)



調査区の中央は地山の落ちが見られ、地形の変換部分となるが、それに沿うようにほぼ南北に走る溝(SD20)が検出された。これは数条の溝が切り合っていると考えられ、中世後半の陶磁器が出土している。また、西側では、貯蔵穴(SU44、SU60)や土坑、ピットが検出されている。以上各遺構の説明は後述するが、ここでは、その他の個別説明では載せていない遺構について述べる。

調査区の東側幅が幅30～50cm、深さ10cmほどの細長い溝が分布している(SD01、SD04、SD69、SD71)。SD01とSD04は1-A、B区に東西方向でほぼ平行に位置している。SD69とSD71は1-D区東壁際に沿うように位置する。これらの溝が相互に関連しているかどうかは不明であるが、SD69とSD71は地形に沿って掘り込まれている。また、SD01、SD04、SD69、SD71からは須恵器片や土師器の皿の破片が出土しており、古代～中世の時期と考えられる。水が流れた形跡もなく、何らかの区画を示すものと考えられよう。それに伴う施設は不明である。

また、SP90、SP191、SP131、SP129、SP47、SP52は調査区中央にほぼ東西方向に並ぶ。ピットの規模はほぼ同じで、土師器の皿や黒色土器、白磁の細片が出土しており、中世前半と考えられ、何らかの建物を推定したが、これらのピットに対応するものが検出できず、明確に建物には比定できなかった。ここでは可能性を示すにとどめる。その他、柱穴になりそうなピットが多数検出された。調査の段階と図面上で検討を行ったが、建物を復元することは不可能であった。以上、第2面では、弥生時代～中世後半に至る遺構が分布する。

### 第3面(第11図)

2-B、C区である。灰茶褐色土、黄褐色土包含層上面に当たる。標高13.4～14.4mを測る。本来は、黒褐色粘質土、灰褐色土の下面で検出されるべき面であるが、遺構の検出が困難であったため、第4面の層まで下げて検出した面である。主にピット、土坑が検出されている。建物は復元できなかった。目立った出土遺物は少ないが、包含層中や遺構から弥生土器が出土している。また、ほぼ宍形の大型蛤刃石斧が2-B区上面から出土している。第3面では、弥生時代の遺構が多いようである。

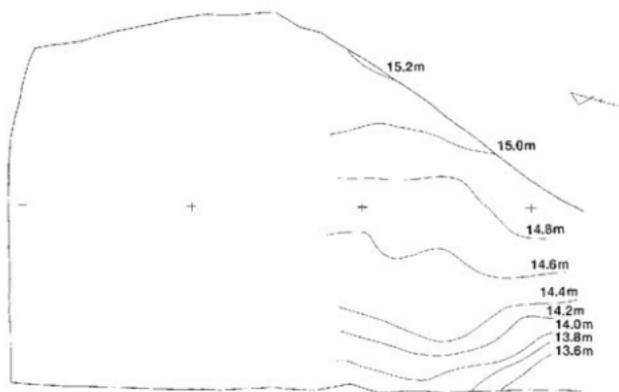
### 第4面(第12図)

2-B、C区である。第3面の遺構を掘削したあとと検出した面である。ここで北東～南西方向に走るSD84は、幅が1.5～2.0m、深さが20～30cmを測り、出土遺物は、弥生土器の細片がほとんどを占める。ちょうど地形の落ち、包含層の縁に沿って走っている。のちに説明する、第2面検出のSD20も地形の落ちに沿って走っているが、これは中世後半の溝であり、時期が異なる。

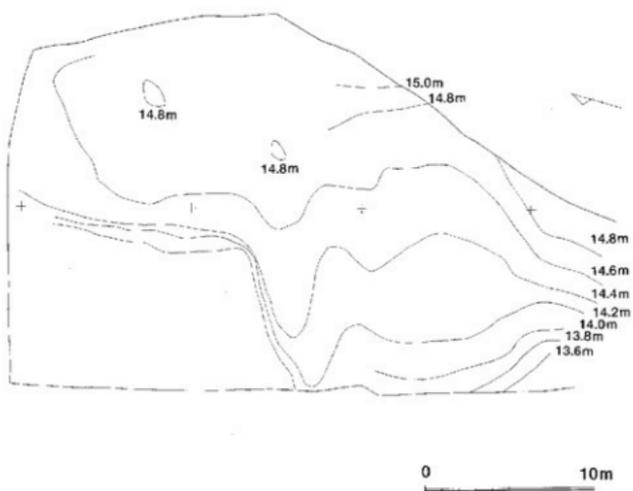
また、SD84を切っているSK85は第5面検出のSK106と一連のものである可能性がある。いずれも弥生土器の細片が出土している。第4面では、弥生時代前期の遺構が多いが、須恵器も出土している。

### 第5面(第13図)

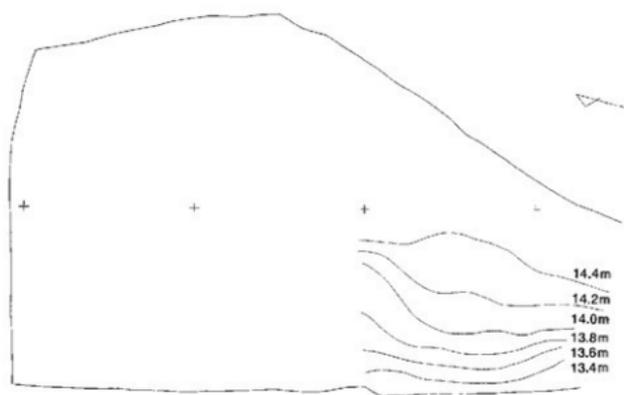
2-B、C区である。地山上面で、標高13.4～13.8mを測る。土坑、ピットが多く検出されている。出土遺物から、弥生時代前期が中心と思われる。SK98、SP337、SP354などが相当する。また、南西端で、赤褐色の埋土が堆積した土坑が検出されているが、出土遺物はなく、人為的なものでないと思われる。



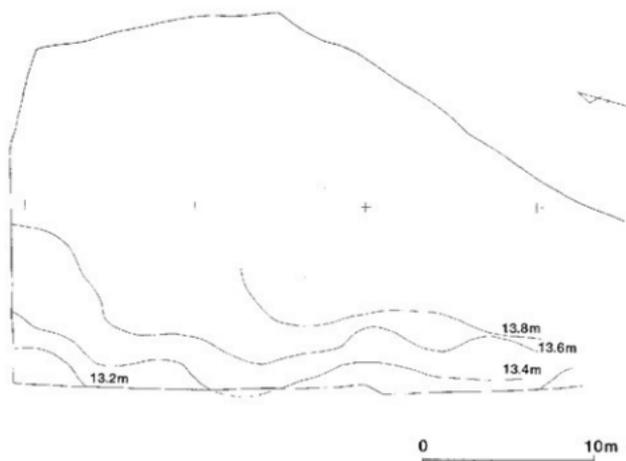
第 14 图 第 1 面地形图



第 15 图 第 2 面地形图



第 16 图 第 4 面地形图



第 17 图 第 5 面地形图

### ③遺構と遺物

以下、遺構の種類ごとに説明を行う。

#### a. 溝

##### SD20 (第18図)

第2面2-A区東寄りに位置し、N-14.5°-Wの方向で走る。北端の幅2.4m、最も深いところで1.1mを測る。断面から見て、数回の掘り直し、もしくは切り合いが考えられる。東側に走る幅10～100cmの溝が最も新しい時期と思われるが、出土遺物から見ると、切り合いに大幅な時期差はない。調査区の中頃で途切れる。堆積状況から見てとくに水が流れた形跡はない。また、溝東側で、大甕がつぶれた状態で出土した。部分的に欠損しているもののほぼ完形である。内部からとくに何も出土しておらず、祭祀行為の結果であるかどうか不明である。溝の時期は出土遺物から見て、16世紀頃と推定される。

##### 出土遺物 (第19～22図)

1は朝鮮王朝陶器の粉青沙器である。口縁部が外反して開く皿で、口径36.0cmを測る。内面には、團線に区画された幾何学的な進弁文、唐草文、幾何学的な花文が白化粒土による象嵌で施される。灰白色の釉が内面と外面上半にかけられる。胎土には金雲母が少量含まれ、赤褐色を呈する。2は染付の碗である。高台径4.5cmを測る。灰褐色の精緻な胎土に緑灰褐色釉が内面と、外面底部付近までかかる。畳付には目跡が残る。3は青磁の皿である。高台径は7.4cmを測る。見込み内面には團線と花文が描かれ、オリーブ色釉がほぼ全面にかかる。灰褐色の精緻な胎土である。畳付に砂目積跡が残る。4は陶器の皿である。高台径は4.6cmを測る。灰黄褐色の精緻な胎土にやや緑がかった灰褐色釉がかかる。畳付は露胎となる。内面に4カ所砂目積跡が残る。5は陶器の小鉢。底径2.7cmを測る。細砂粒を少量含む赤褐色胎土で、内面と外面に灰緑色釉がかかる。底部は露胎となる。

6は十師器の皿である。口径9.8cm、器高2.4cm、底径4.7cmを測る。径2.0mm以下の砂粒、金雲母をやや多く含む胎土で、白黄色を呈する。底部はへう切りである。7は色絵の磁器である。底径3.8cm、残高4.4cmを測る小壺である。精緻な胎土に内面は淡灰褐色釉、外面には淡緑色釉がかかる。外面は施釉されたあとに花文や雲文を赤や緑で絵付けする。8は須忠器の壺である。砂粒と金雲母をやや多く含む胎土で灰褐色を呈する。

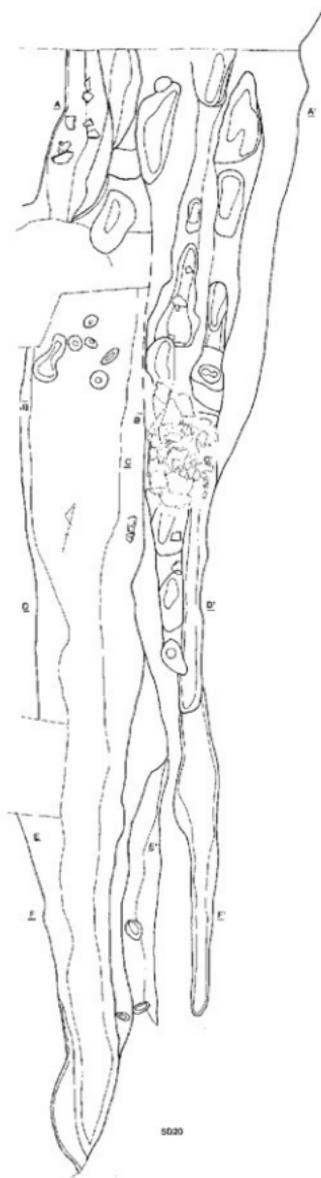
9は瓦質の大甕である。コップ形を呈する。口径69.0cm、器高71.0cm、底径37.0cmを測る。径3.0mm以下の砂粒、金雲母を多量に含む胎土で、灰黄褐色を呈する。外面には縦方向のハケメが部分的に残り、底部の内面と外面にはハケメが施される。溝に埋置された状態でつぶれて出土している。食料か水の貯蔵用であろうか。以上、1以外は溝の東側から出土している。

10は陶器の鉢である。口径22.0cmを測る。灰褐色の胎土で、内外面に白黄色の釉がかかる。11は備前焼の甕である。口径24.2cm、残高21.0cmを測る。赤褐色の精緻な胎土である。12は半瓦である。両面にハケメ様の調整が施され、孔が穿たれる。1、10～12は溝の西側から出土している。

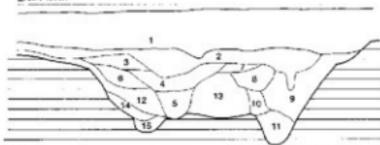
#### b. 井戸

##### SE76 (第23図)

第2面1-B区、調査区の東壁際で検出された。前述したように、東壁際付近が視乱や遺構の切り合いで不明瞭であったため、まずトレンチによる確認作業を行った。埋土の上層は地山ブロックが多

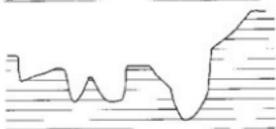


LH=14.1m



- |                  |                   |                |
|------------------|-------------------|----------------|
| 1 表土             | 6 黄褐色土            | 13 区境内砂質土と     |
| 2 腐り切った赤褐色土ブロック  | 7 腐褐色砂質土          | 14 区境外砂質土との互層  |
| 3 少量混じった黄褐色土     | 8 腐化物質の黄褐色土       | 15 黄褐色土と腐褐色土との |
| 4 2.5m, 中程度の腐褐色土 | 9 埋戻土             | 16 互層          |
| 5 2.5m, 中程度の腐褐色土 | 10 2.5m, 中程度の腐褐色土 | 17 腐化物質の砂質土    |
| 6 4.4m, 腐褐色土     | 11 腐化物質の砂質土       | 18 腐化物質の砂質土    |
|                  | 12 腐化物質の砂質土       |                |

A LH=13.9m



g LH=13.7m

- |                |                |
|----------------|----------------|
| 1 区境外土         | 4 埋戻ブロック間の黄褐色土 |
| 2 腐化物質の腐褐色土    |                |
| 3 埋戻ブロック間の腐褐色土 |                |
| 4 埋戻ブロック間の黄褐色土 |                |

c LH=13.8m

- |             |
|-------------|
| 1 赤褐色土の腐化物質 |
| 2 腐化物質土     |
| 3 腐化物質の黄褐色土 |
| 4 溝口        |

d LH=13.9m



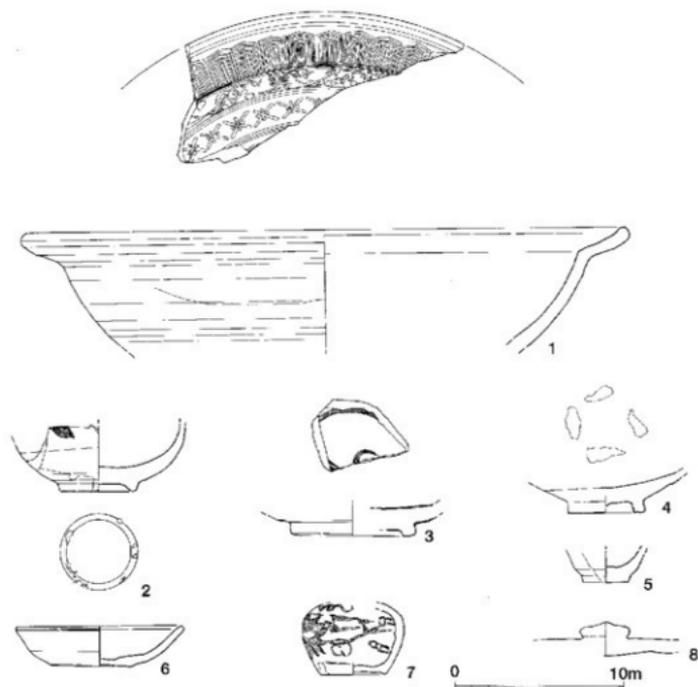
e LH=14.1m

- |                 |
|-----------------|
| 1 埋戻物質の腐褐色土     |
| 2 埋戻ブロック小溝の腐褐色土 |
| 3 腐褐色土          |

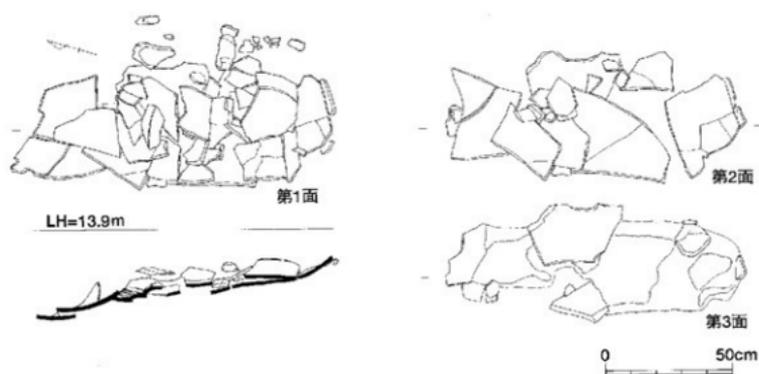
f LH=14.3m



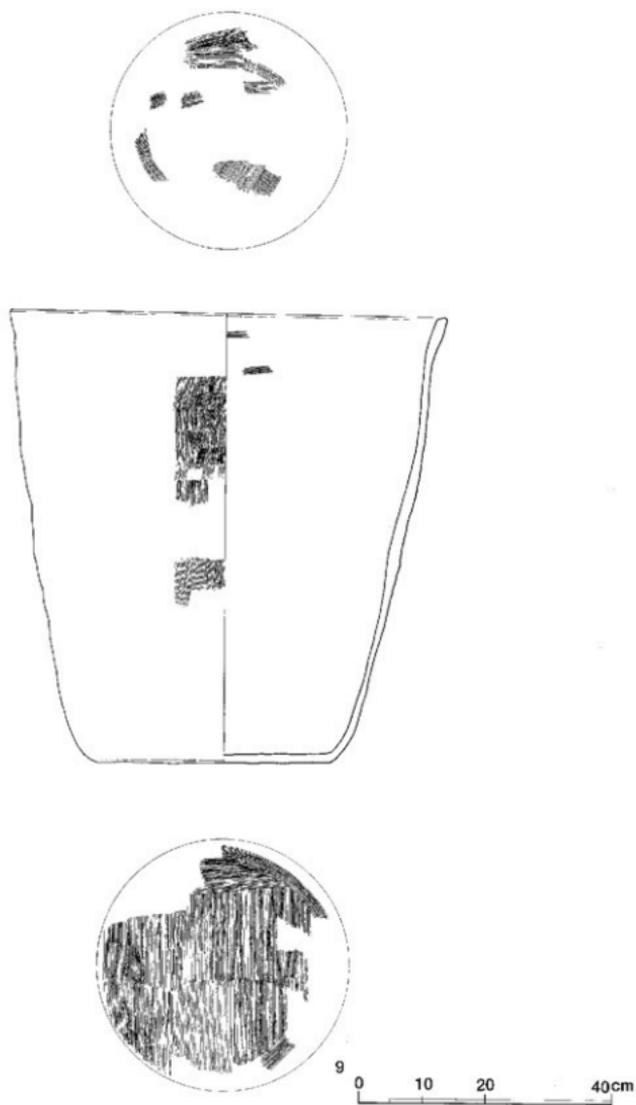
第18図 SD 20 実測図 (1/50)



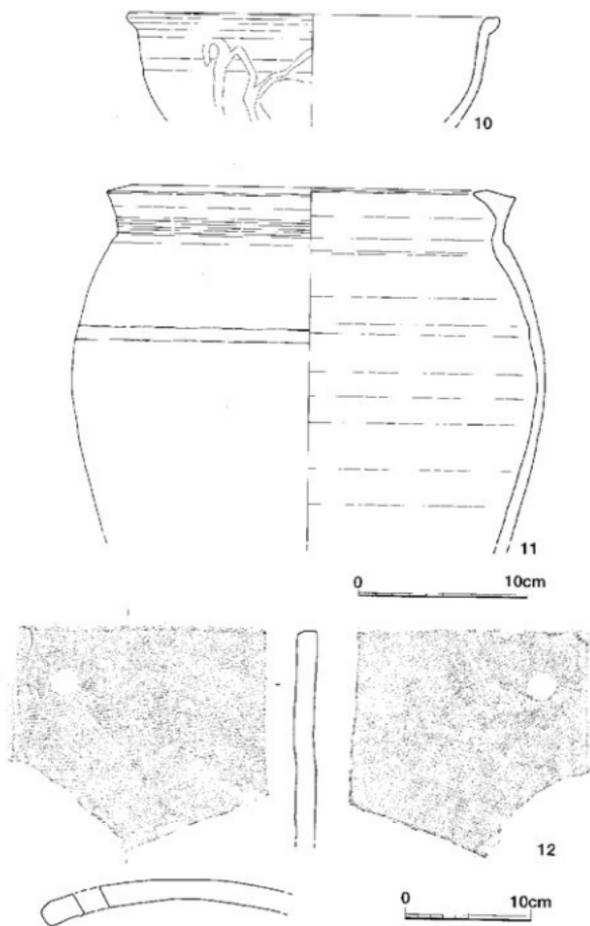
第19図 SD 20 出土遺物実測図1 (1/3)



第20図 SD 20 内大甕実測図 (1/20)



第 21 图 S D 20 出土大甕実測图 (1/8)



第 22 图 S D 20 出土遺物実測図 2 (2/3, 1/4)

く、短期間に埋め戻し作業が行われたと推定された。2m程掘り下げたが底面が検出されず危険であったため、調査終了間際に掘削を行うことにした。貯蔵穴と思われる遺構と切り合っていたため、それらの遺構を一定の深さまで下げたところ、掘方の平面形が確認されたため、他の遺構を掘削し終えた後に掘り下げに取りかかった。

井戸城方の平面形はほぼ楕円を呈し、長径5.7m、短径5.1mを測る。深さは5.4mを超える。2m程掘り下げた時点で、井筒が検出され、深さ3.6mで井戸桶が数段重ねられた状態で検出され始めた。井戸桶は4段以上重ねられていたが、深くなり危険であったため、4段目以降は取り上げを断念している。井戸桶は、1段目は半分ほど欠損していたが、2、3段目はいずれも径が約75cm、高さが約56cmを測る。長さ約56cm、幅約6cmの板を40～47枚合わせて竹のタガで締めて作られた結物であり、上部よりも下部の径がやや大きく、上段の桶を下段の桶にかぶせるように順次重ねている。井戸桶の3段目で建築部材と木製の白が出土した。また、一抱えほどある石が多数投げ込まれていた。水の沸き具合から井戸の底面は近いと思われる。

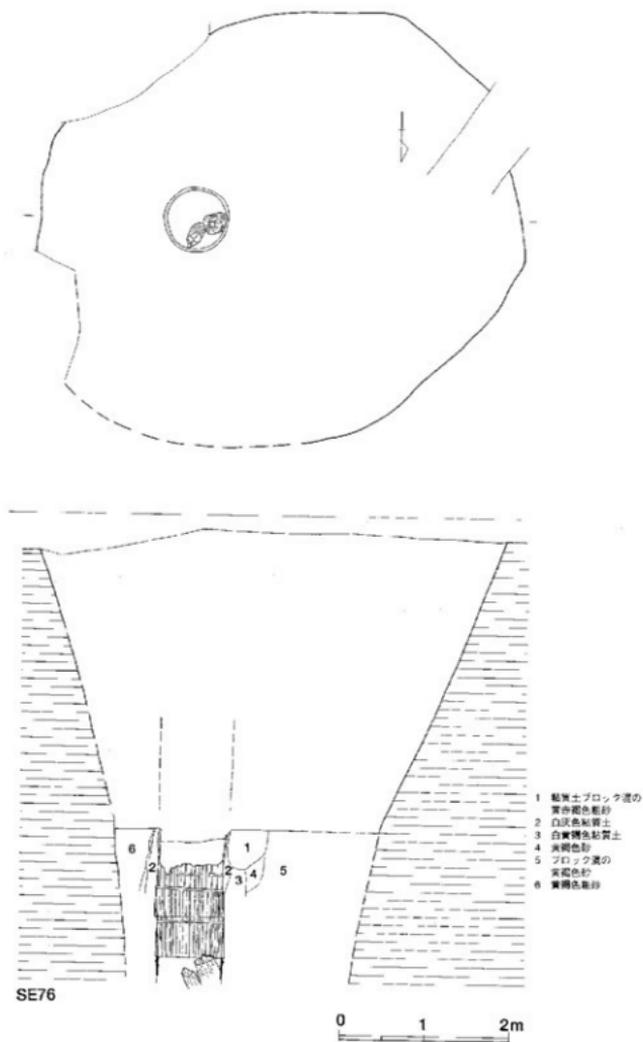
出土遺物は少なかった。とくに井筒からは上記の木製品と石以外はなく、わずかな出土遺物はすべて掘方からである。

#### 出土遺物（第25・26図）

13は東播磨系のこね鉢である。口径39.4cmを測る。外面は摩耗が激しいが、内面にはハケメが施される。径5.0mm以下の砂粒を多量に、金雲母を含む胎土で、淡赤褐色を呈する。14は須恵器の蓋である。口径10.5cm、器高3.1cmを測る。径2.0mm以下の砂粒、金雲母を多量に含む胎土で青灰色を呈する。天井部は回転ヘラケズリ、外面下部は回転ナデ、内面はナデで調整される。天井部にはヘラ記号が刻まれる。15は陶器の碗である。底径は4.2cmを測り、やや上げ底となる。細砂粒をわずかに含む灰褐色～赤褐色を呈する胎土である。透明な釉が内外面につけられ、外底は露胎となる。見込みと外底に推定4カ所の砂目積跡が残る。

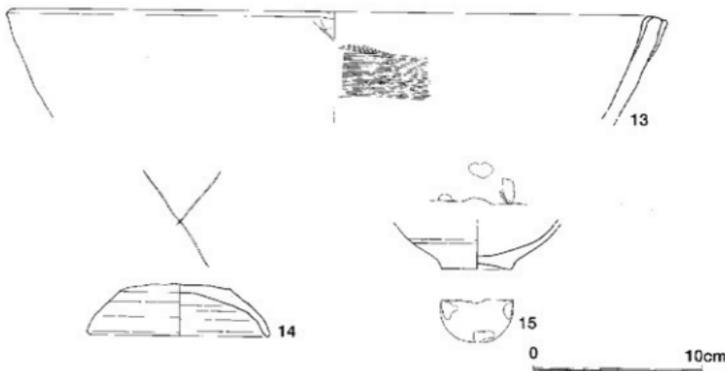
16は木製の臼であろう。径25.0cm、高さ32.2cmを測る。一本作りで片面を突起状に削りだしている。その面には放射状に切り込みが入る。把手などはついていない。17は建築部材である。残長84cmを測る。貫通していないほぞ孔が穿たれている。白はあまり使用された痕跡が見られず、建築部材とともに祭祀的な目的で廃棄されたものと思われる。

その他、図示していないが、井筒として用いられた井戸桶の計測表を示す（第24図・表1）。前述のように、井戸桶は3段取り上げた。そのままの状態では取り上げることはできなかったが、板1枚ずつに番号を付けて外していった。1段目は上半部を欠損していたが、2、3段目の残存状況はよい。1段目の桶は、幅4.3～6.6cm、厚さ0.8～1.5cmの長方形の細長い板を47枚用いている。2段目の桶は、長さ55.0～56.3cm、幅3.8～7.5cm、厚さ0.6～1.3cmの板を42枚、3段目の桶は、長さ54.7～56.7cm、幅4.7～6.9cm、厚さ0.8～1.6cmの板を41枚用いている。おおまかな規格はそろっているが、ばらつきは見られる。また、板は、外側になる方が微妙に湾曲しており、上部の厚さより下部の厚さの方が1mmほど薄くなっている。下部の径の方が若干大きく、下段の桶の上部にかぶせられるようになっている。また、2段目の桶のすべての板は、上部端に面取り加工が施してあるが、3段目の桶は加工はなされていない。その他、板にはゆるみを防ぐためのものと思われるくさびの跡がところどころ残っており、タガで板を締めたあとにくさびとする板を入れて補強したと思われる。日張りなどは見られなかった。



第 23 図 SE 76 実測図 (1/60)





第25図 SE 76 出土遺物実測図 (1/3)

### c. 貯蔵穴

貯蔵穴と思われる土坑が調査区の全面にわたっていくつか検出されている。

#### SU08 (第27図)

第2面1-A区、調査区北東隅に位置する。一部壁に切られるが、平面は楕円形を呈し、長軸2.4m以上、短軸1.8m以上、深さ0.6～1.2mを呈する。底面西側は段掘り状となる。出土遺物は少ない。

#### 出土遺物 (第27図)

18は弥生土器の甕の底部である。底径6.9cmを測る。摩耗が激しく、径2.0mm以下の砂粒や多く、金雲母を含む胎土で、外面は暗赤褐色、内面は赤褐色を呈する。外面には黒斑が残る。

#### SU44 (第27図)

第2面2-A区に位置する。掘り下げる過程で壁がふくらみ貯蔵穴とわかった。フラスコ状を呈する土坑で、上端の平面形は楕円を呈し、長軸2.15m、短軸1.50mを測る。下端の平面形も楕円形を呈し、長軸2.75m、短軸1.50mを測る。深さ0.75～1.45mを測る。底面の東に段掘り状の落ち込みが見られる。また南端にはピットが見られ、その直上に弥生時代前期の甕が若干つぶれた状態で検出された。その他埋土中より弥生土器片が出土している。

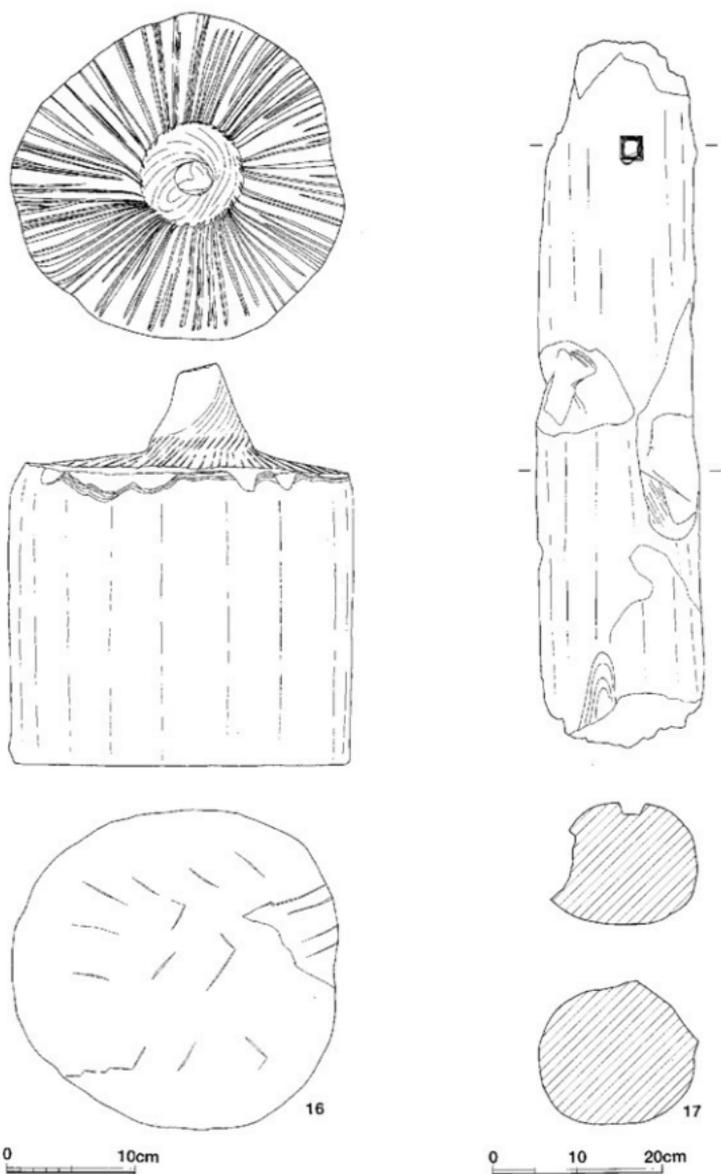
#### 出土遺物 (第27図)

20は甕である。口径23.5cm、器高26.0cm、底径8.2cmを測る。口縁部は外反し、口唇部に不規則に刻み目が入る。外面にはハケメが、内面には指押さえの跡が残る。胎土には砂粒と金雲母が多量に含まれ、暗褐色～明褐色を呈する。ほぼ完形である。弥生時代前期後葉であろう。

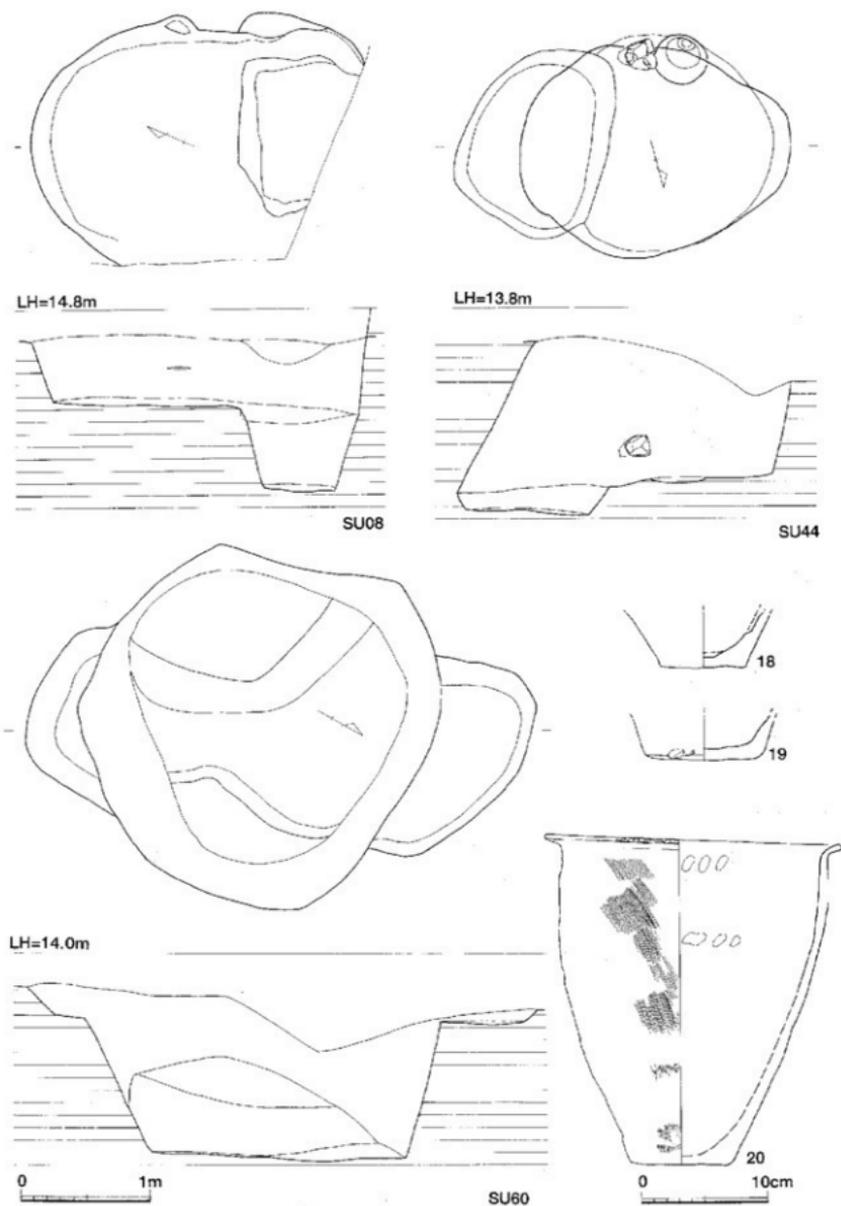
#### SU60 (第27図)

第2面2-A区に位置する。当初、遺構検出の段階では、平面のプランは確認できなかった。地山面に亀裂が入り、汚れた状態であったため、面を下げ、プランを検出して掘り下げた。本来はフラスコ状にふくらむ形状をとると思われるが、掘り下げの段階で危険であったため上端を広げて下げていった。平面は変形の楕円形を呈する。長軸は4.0m、短軸は2.9mを測る。深さは1.3mである。出土遺物は少ない。

19は弥生土器甕の底部である。底径9.0cmを測る。径2.0mm以下の砂粒と金雲母を多量に含む胎



第 26 图 SE 76 出土遗物实测图 (1/4,1/6)



第 27 图 贮藏穴实测图 (1/40)、出土遗物实测图 (1/4)

土で、淡赤褐色を呈する。

d. 土坑

SK03 (第28図)

第2面1-A区、東壁際に位置する。この付近は攪乱やSE76、SK54などの切り合いが激しく、遺構が明確に検出できない状態であった。本来は平面円形を呈すると思われる。土師器の皿や須恵器片が出上している。

出土遺物 (第30図)

21は須恵器の杯である。砂粒をやや多く、金雲母を少量含む胎土で灰褐色を呈する。6世紀末～7世紀初頭にかけての時期であろう。

SK54 (第28図)

第2面1-B区、東壁際に位置する。平面形は楕円を呈すると思われ、長軸は6mを測る。形状はSK03に類似する。SE76と壁に切られているためにそれ以上の掘り下げは不可能であったが、貯蔵穴の可能性も考えられる。ただ、埋土からは中世の遺物が出土している。

出土遺物 (第30図)

22はすり鉢である。口径は29.0cmを測る。砂粒、金雲母、カクセン石を多量に含む胎土で黄褐色～淡赤褐色を呈する。内面にはハケメ調整の上に5条1単位のスリ目が入る。東播系であろう。23は白磁の皿である。高台径は6.3cmを測る。精緻な白色胎土にやや青みがかった透明釉が全面にかかる。見込みと畳付にそれぞれ9カ所の胎土目跡が残る。

SK39 (第28図)

第2面1-A区に位置する。攪乱に切られているが、平面は長方形を呈し、一辺が1m、深さ10cmを測る。土師器の杯が出土している。

出土遺物 (第30図)

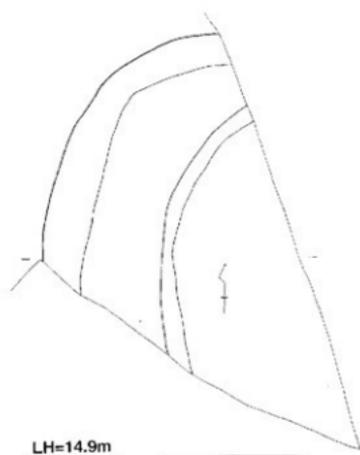
27は土師器の杯である。口縁部端は外反し、底部まで緩く丸みを帯びる。砂粒と金雲母を少量含む赤褐色を呈する。7世紀頃であろうか。

SK16 (第28図)

第2面1-A区のSD20 東側に位置する。平面は楕円形を呈し、長軸2.75m、短軸1.10m、深さ20cmほどを測る。地山の落ち際に位置し、地形に沿って掘り込まれるため、底面も傾斜している。陶磁器や瓦頭片が出土している。出土遺物から16世紀頃と思われる。

出土遺物 (第30図)

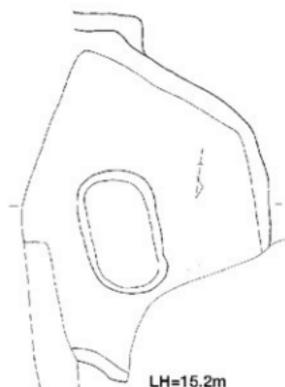
24は瓦製の火鉢であろう。底径11.0cmを測る。細砂粒、金雲母を少量含む胎土で、赤褐色を呈する。内面にはススが付着している。25は染付の紅皿であろうか。口径4.5cm、器高1.5cm、底径2.2cmを測る。白色の精緻な胎土で、内面から外面上半にまで透明釉がかかり、外底は露胎となる。見込みにねじ花に似た花文が青で描かれる。32は軒丸瓦である。瓦頭径は約15cmで、内区は左巻きの三つ巴文である。頭部はやや大きめで尾は1/4めがって他の尾につく。外区には珠文が配される。周縁の幅は1.9cmを測る。



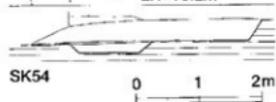
LH=14.9m



SK03



LH=15.2m

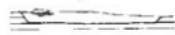


SK54

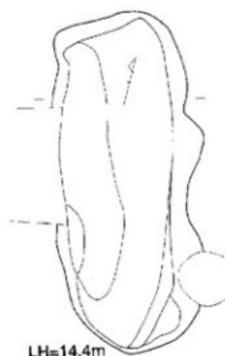
0 1 2m



LH=13.9m



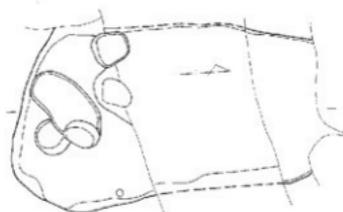
SK39



LH=14.4m



SK16



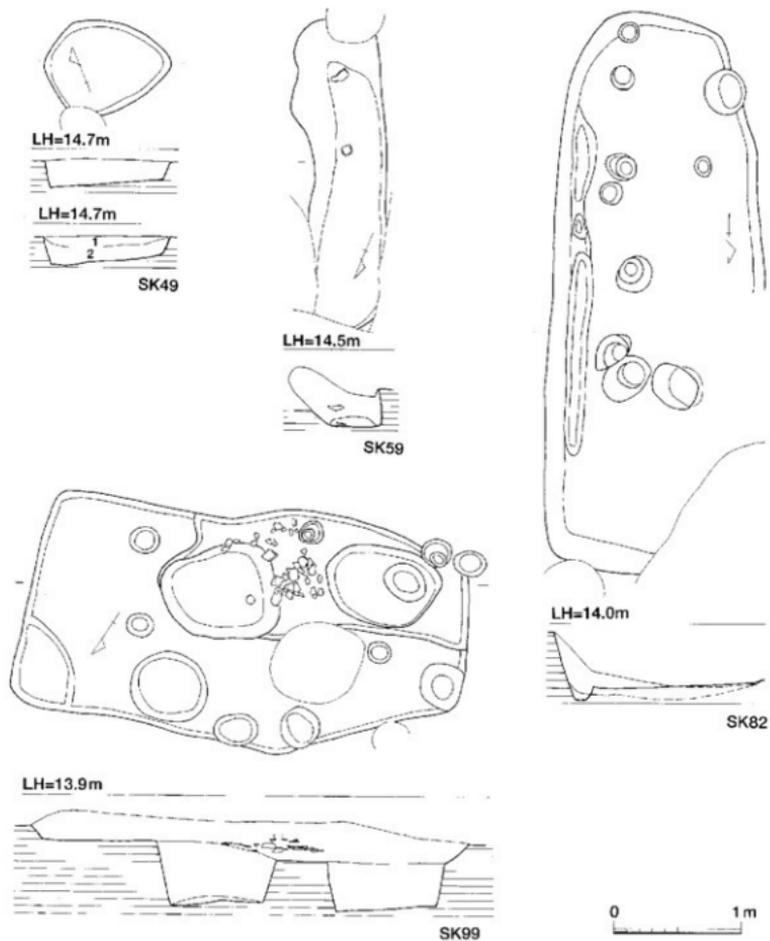
LH=13.9m



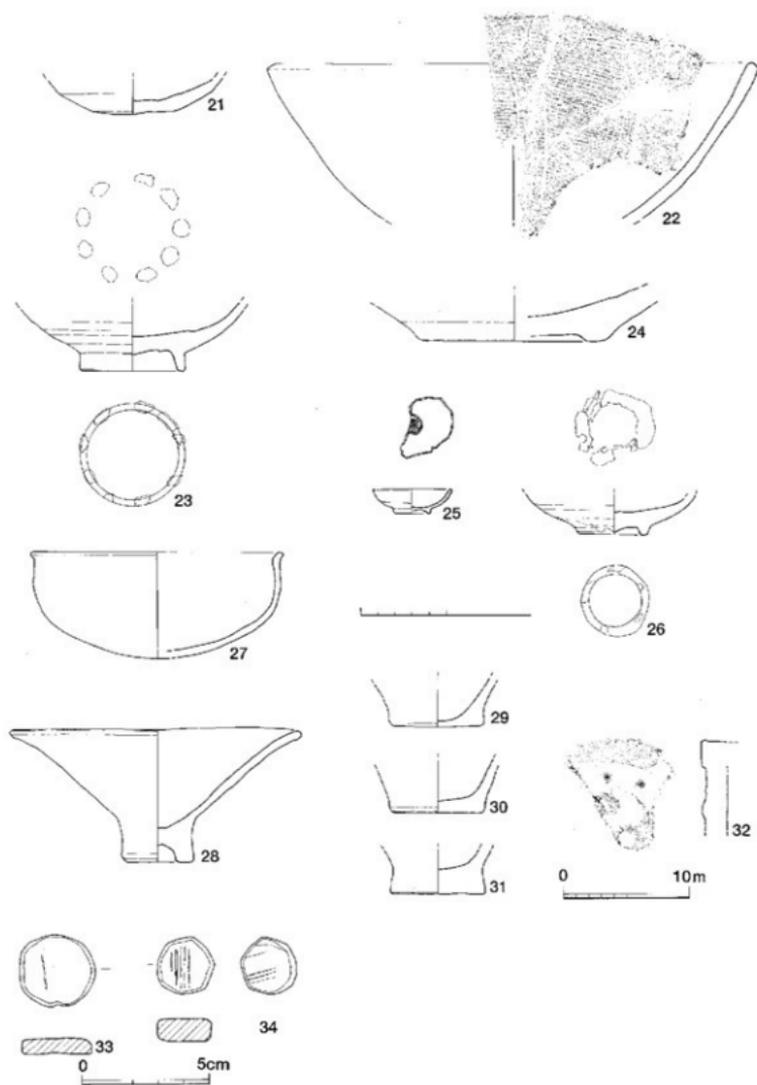
SK35

0 1m

第 28 图 土坑实测图 1 (1/40, 1/80)



第 29 図 土坑実測図 2 (1/40)



第 30 图 土坑出土遗物实测图 (1/3,1/4,1/2)

#### SK35 (第28図)

第2面2-A区、SK39の東に位置し、切られる。平面は長方形を呈し、長辺は約2.35m、短辺は約1.4m、深さは20～50cmを測る。SK39に切られていることから、7世紀より古い時期と思われる。円形土製品が出土している。

#### 出土遺物(第30図)

33は円形土製品。土器の器壁を利用して作られている。径2.9cm、厚さ0.6cmを測る。砂粒、金雲母を含む胎土で灰白色を呈する。

#### SK49 (第29図)

第1面2-C区に位置する。平面は楕円形を呈し、長軸1.0m、短軸0.75m、深さ20cmを測る。円形土製品が出土している。

#### 出土遺物(第30図)

34は円形土製品。32と同様土器の器壁を再利用して作られる。両面にハケメ様の調整痕が残る。径2.2cm、厚さ0.9cmを測る。細砂粒、金雲母を多く含む胎土で淡赤褐色を呈する。

#### SK59 (第29図)

第2面2-A区、SK16の西側に切られて位置する。平面は細長い楕円形を呈し、長軸2.4m、短軸60～70cm、深さ30cmを測る。陶器の皿が出土している。

#### 出土遺物(第30図)

26は陶器の皿。高台径は4.1cmを測る。淡赤褐色の精緻な胎土に、灰赤褐色の釉がかかる。高台と外面下半は露胎となる。畳付に5カ所、見込みにつながった状態で胎上日跡が残る。

#### SK82 (第29図)

第4面2-C区、西壁際に位置する。平面は長方形を呈し、長軸4.5m、短軸1.7m、深さ6～58cmを測る。東壁際に、長さ2.76m、幅16cm、深さ5cmの側溝状の溝が走る。また、床面にはビットが分布している。摩耗の激しい弥生土器片が多く出土しているが、細片が多く復元は不可能であった。弥生時代前期頃であろうか。

#### SK99 (第29図)

第5面2-B区に位置する。平面はほぼ長方形を呈し、土坑状のビットが2基並ぶ。平面の長軸3.5m、短軸1.8m、深さ20～60cmを測る。弥生土器が散布していた。出土土器から、弥生時代前期後葉～中期初頭頃と思われる。

#### 出土遺物(第30図)

28は鉢。朝顔状に大きく外反する器形である。底部は上げ底を呈する。口径22.9cm、器高10.5cm、底径5.2cmを測る。砂粒と金雲母を多量に含む胎土で暗黄褐色を呈する。底部の形状から弥生時代前期後葉～中期初頭頃と思われる。29～31は甕の底部である。29は底径7.2cm、30は7.2cm、31は7.4cmを測る。いずれも平底であるが、31は底部を厚く仕上げている。いずれも砂粒と金雲母を多量に含む胎土で、29は外面黄褐色、内面暗褐色、30は外面明赤褐色、内面暗褐色、31は外面赤褐色、内面茶褐色をそれぞれ呈する。

e. ビット

SP38 (第31図)

第2面2-B区に位置する。一部擾乱に切られるが、平面楕円形を呈し、長軸80cm、短軸70cm以上、深さ80cmを測る。柱状が残る。

出土遺物 (第32図)

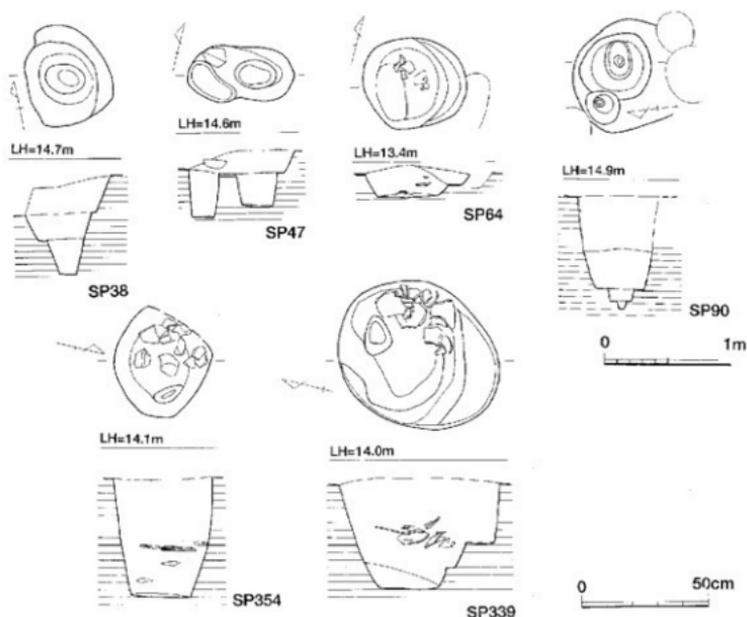
48は砂岩の砥石である。残長9.5cm、幅7.7cm、厚さ4.5cmを測る。3面が砥面として使用されている。

SP47 (第31図)

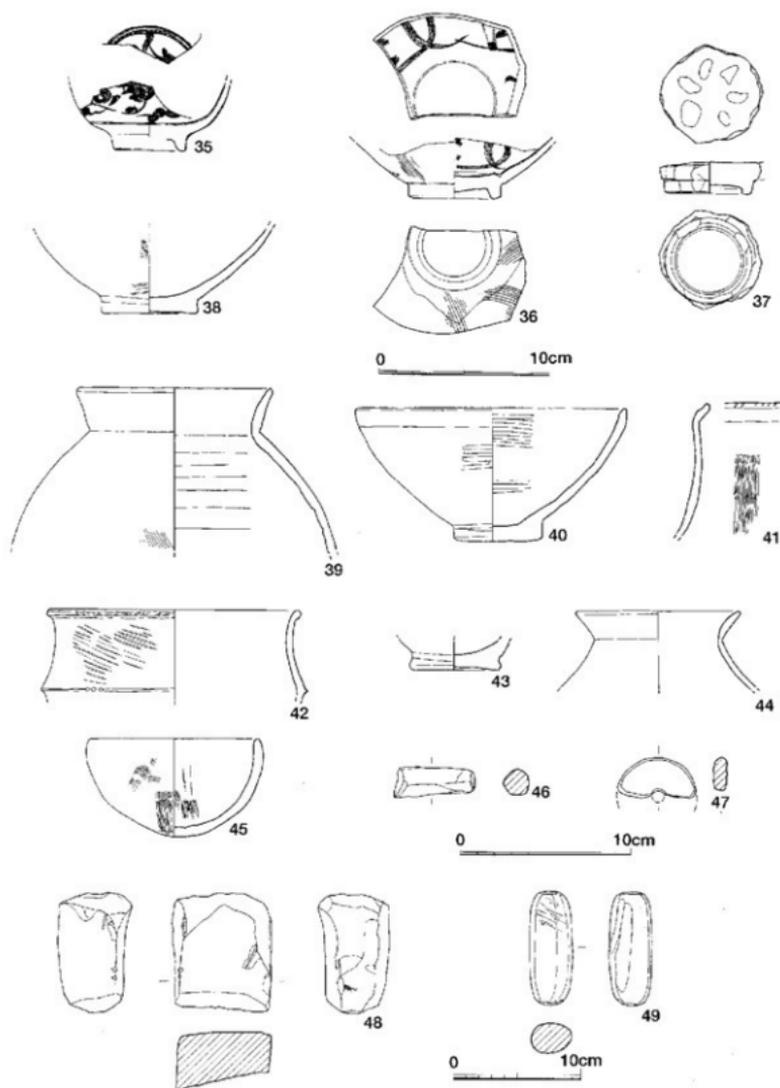
第2面2-B区に位置する。2基のビットが切り合っている。平面は楕円形を呈し、長軸85cm、短軸45cm、深さ45cmを測る。

出土遺物 (第32図)

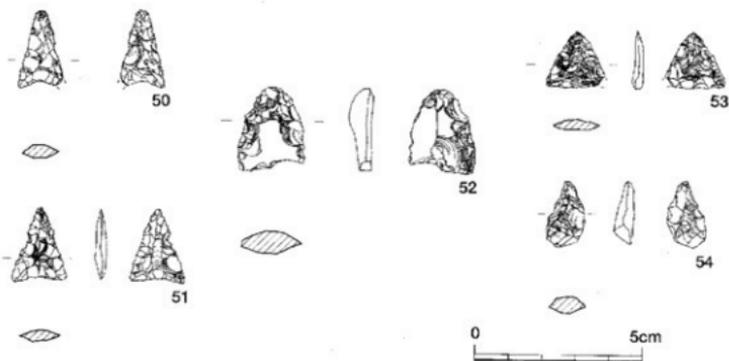
36は同安窯系の青磁の碗である。高台径5.4cmを測る。精緻な灰褐色の胎土に淡いオリーブ色釉が外面の底部付近までかかり、高台は露胎となる。外面には放射状に柳描文が、内面には片切彫りの流線が施される。



第31図 ビット実測図 (1/40,1/20)



第 32 図 ビット出土遺物実測図 (1/3, 1/2)



第33図 ビット出土石器実測図(2/3)

**SP64 (第31図)**

第2面2-A区に位置する。平面は楕円形を呈し、長軸85cm、短軸70cm、深さ20cmを測る。

出土遺物(第32図)

39は甕もしくは広口壺である。口径15.0cmを測り、砂粒と金雲母を多量に含む胎土で赤褐色を呈する。外面にはハケメが一部残り、内面には粘土紐を積み重ね、指押さえとナデで仕上げた跡が残る。弥生時代終末であろう。

**SP90 (第31図)**

第2面1-B区に位置する。平面は円形を呈し、径90cm、深さ85cmを測る。柱状が残る。

出土遺物(第32図)

46は土師器の把手であろう。残長4.7cm、最大径1.8cmを測る。砂粒と金雲母をやや多く含み、淡赤褐色を呈する。

**SP354 (第31図)**

第5面2-B区に位置する。平面は楕円形を呈し、長軸43cm、短軸35cm、深さ47cmを測る。弥生土器片が集中して出土した。

出土遺物(第32図)

42は甕である。口縁部と逆く字状に屈曲した胴部上位に突帯がめぐらされ、刻み目が施される。外面にはハケメ調整がなされる。砂粒を多く含み、赤褐色を呈する。43は甕の底部。底径7.0cmを測り、厚めに仕上げる。砂粒と金雲母をやや多く含む胎土で赤褐色を呈する。いずれも弥生時代前期後葉頃であろう。

**SP339 (第31図)**

第5面2-B区、SP354の北側に位置する。平面は楕円形を呈し、長軸65cm、短軸55cm、深さ45cmを測る。弥生土器片が集中して出土している。

出土遺物(第32図)

40は鉢である。口径21.3cm、器高10.7cm、底径6.9cmを測る。口縁部が緩く湾曲して立ち上がり、

底部は円盤を貼り付けたような形態をとる。ミガキ様の調整が内外面に残る。砂粒と金雲母を多量に含む胎土で、外面は黄褐色、内面は赤褐色を呈する。外面には黒斑が残る。41は甕である。口縁部はく字状に緩く屈曲する。口幹部に刻み目が入り、胴部外面にはハケメが施される。弥生時代前期後葉か。

その他、ピットから出土した遺物を説明する。

#### SP35 (第32図)

第1面2-B区に位置する。35は青花碗F類。外面には團線と唐草文、見込みには團線と唐草文と思われる文様が描かれる。高台径4.2cmを測り、精緻な白色胎土に高台外側まで透明釉がかかる。畳付と高台内部は露胎となる。16世紀末～17世紀初頭頃か。

#### SP81 (第32図)

第2面1-B区に位置する。37は青磁の底部を円形に加工したものである。径約6.0cm、高台径5.1cmを測る。見込みと底部にはそれぞれ6カ所、3カ所の胎土目跡が残る。精緻な灰白色の胎土に緑灰色の釉がかかる。畳付と高台内部は露胎となる。

#### SP244 (第32図)

第2面2-C区に位置する。45は碗である。ボール状を呈する。口径13.5cm、器高7.9cmを測る。内外面にハケメが施され、砂粒と金雲母を多量に含む胎土で、淡明赤褐色を呈する。弥生時代終末～古墳時代初頭頃か。

#### SP331 (第32図)

第5面2-B区に位置する。44は古式土師器の甕である。口径12.8cmを測り、砂粒をやや多く含む胎土で淡黄褐色を呈する。

#### SP364 (第32図)

第5面2-B区に位置する。49は穀石である。全長9.2cm、幅3.3cm、厚さ2.4cmを測る。

50～54は黒曜石の石鏃である(第33図)。50は第1面1-A区に位置するSP09出土。長さ2.3cm、基部の幅1.3cm、厚さ0.4cmを測る。基部の挟りは浅い。51は第2面2-C区に位置するSP240出土。長さ2.2cm、基部の幅1.6cm、厚さ0.3cmを測る。基部の挟りは浅い。52は第2面2-C区に位置するSP247出土。未製品か。長さ2.5cm、基部の幅1.9cm、厚さ0.7cmを測る。53は第3面2-B区に位置するSP293出土。ほぼ正三角形を呈する。長さ1.7cm、基部の長さ1.8cm、厚さ0.3cmを測る。54は第5面2-B区に位置するSP336出土。長さ2.0cm、基部の幅1.3cm、厚さ0.6cmを測る。

#### f. 包含層出土の遺物(第34図)

55は包含層第1面から出土した。甕の底部である。底部付近を意図的に打ち欠いたと思われる。底径は14.0cmを測る。大きめの砂粒、金雲母、カクセン石を多量に含む胎土で外面は淡赤褐色、内面は暗黄褐色を呈する。56は包含層第3面上より出土した。今山産玄武岩製の大型蛤刃石斧である。

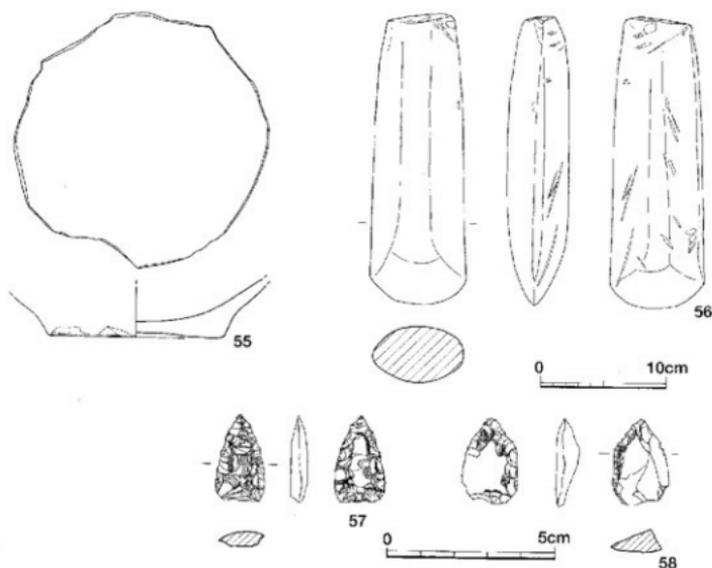
ほぼ完形で、摩耗は見られずあまり使用されていない。全長23.4cm、幅7.5cm、厚さ5.0cm、重量約1.5kgを測る。57は包含層第2面中より出土。黒曜石製の石鏃で、長さ2.6cm、基部の幅1.5cm、厚さ0.5cmを測る。58は包含層第3面中より出土。黒曜石製の石鏃で未製品。長さ2.6cm、基部の幅1.7cm、厚さ0.7cmを測る。

g. その他の出土遺物 (第35図)

その他、遺構検出中や掘削から出土した遺物を述べる。

59は青磁碗。口径12.4cm、残高5.4cmを測る。B-IV類で、外面には細線と剣頭とで蓮弁文が描かれている。白灰色の精緻な胎土にオリーブ色釉がかかる。15世紀後半～16世紀初め頃か。60は青花皿B群。口径11.3cm、器高2.6cm、底径5.6cmを測る。精緻な白色の胎土に透明釉がかけられる。見込みには團線と唐草文と思われる文様が描かれる。15世紀後半～16世紀前半頃か。61は白磁の皿E群。精緻な白灰色の胎土に淡灰緑色の釉が登付までかかり高台内側は露胎となる。15世紀後半～16世紀前半頃であろう。62は陶器の鉢。底径4.4cmを測る。赤褐色胎土に緑がかかった灰褐色釉が内面と外面上半にかかる。63は陶器の皿。底径5.4cmを測る。淡赤褐色胎土に灰緑色釉が内面と外面にかかる。登付と高台内部は露胎となる。

64、67は土師器の杯。64は底径7.1cm、67は6.7cmを測る。いずれも糸切り離し底部である。64は砂粒と金雲母をやや多く含む胎土で明赤褐色を呈する。67は細砂粒と金雲母を多く含む胎土で赤褐色を呈する。65は須恵器の蓋。疑似宝珠形のつまみが付き、天井部は回転ヘラケズリ、内面はナ



第34図 包含層出土遺物実測図 (1/4,2/3)

デで調整される。砂粒と金雲母をやや多く含む胎土で、灰褐色を呈する。66は土師器の小皿。口径6.4cm、器高1.0cm、底径4.7cmを測る。砂粒と金雲母をやや多く含む胎土で明赤褐色を呈する。ススが付着する。

68は甕。如意形の口縁部を呈し、口唇部には刻み目が施される。口径21.4cmを測る。外面には縦方向のハケメが施され、内面には擦痕が残る。砂粒、金雲母、カクセン石を多く含む胎土で暗黄褐色を呈する。69は甕の底部で、底径7.4cmを測る。底部には焼成前穿孔が施される。砂粒と金雲母を多量に含む胎土で明赤褐色を呈する。外面に縦方向のハケメが、内面には指押さえの痕跡が残る。70は球状の土製品。径1.9cmで、孔が穿たれる。細砂粒と金雲母を含み、暗褐色を呈する。71は円形土製品。土器を再利用して作られたもので、径4.8cm、厚さ1.1～1.3cmを測る。金雲母、細砂粒を含む胎土で暗褐色を呈する。

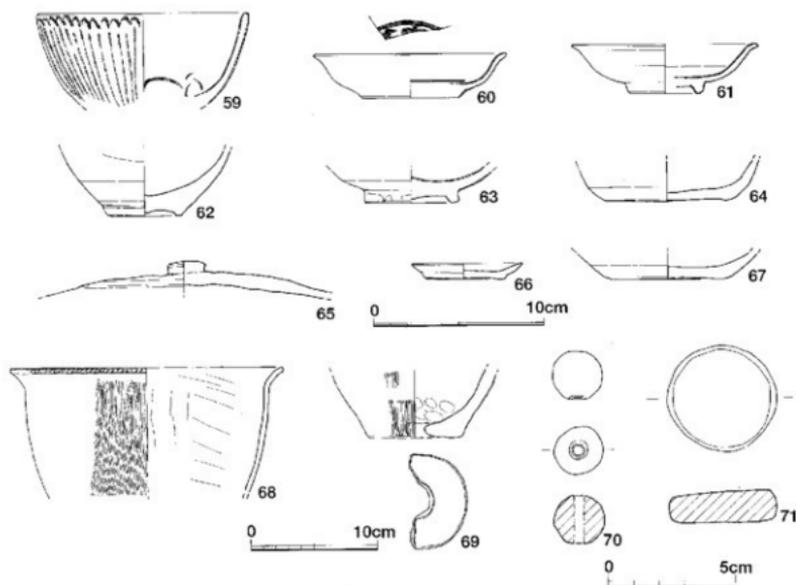
## 5. 小 結

以上、今回の調査で判明したことをまとめてみたい。

本調査は上月隈B遺跡群の第1次の調査となる。遺跡群は月隈丘陵の支尾根の一部に位置するが、独立丘陵状となる地形である。今回は、Ⅰ区とⅡ区の2カ所の調査となったが、Ⅰ区はこの丘陵裾部の沖積地上、Ⅱ区は、丘陵麓付近の平坦地上で花崗岩パイラン土上にそれぞれ位置する。

Ⅰ区では溝やピットが検出され、集落が丘陵裾部まで広がることが確認された。ただ、遺構の状況から見て、集落の中心からは外れていると考えられる。

Ⅱ区では弥生時代前期から中世後半までの遺構が検出された。ここでは各時代ごとに見てみたい。



第35図 その他出土遺物実測図 (1/3, 1/4, 1/2)

## 弥生時代

弥生時代の遺構としては、SU08、SU44、SU60の一連の貯蔵穴、SK82、SK99、SP354、SP339、SP38、SP64などが挙げられる。その他弥生時代に属する遺物も出土している。このうち、貯蔵穴群、土坑、SP354、SP339は弥生時代前期後葉頃であり、弥生時代では当該時期が主体を占めている。ただ、弥生時代終末の遺物が出土しているSP64や概期の出土遺物から、弥生時代終末の遺構もわずかながら存在していたと考えられる。各時期の遺構は調査区全域、第2面～第5面に分布している。

## 古墳時代

SK03、SK39、SP244、SP331、その他古墳時代の須恵器が出土している。SK03、SK39は6世紀末～7世紀初頭、SP244、SP331は古墳時代初頭頃に比定される。第2面、第5面に分布しているが、遺構、遺物ともに少ない。

## 古代

古代に属するかと思われる須恵器の蓋が出土しているのみで遺構としては確認されていない。

## 中世

SD20、SE76、SK54、SK16、SK59、SP47、SP35、SP81、その他擾乱からの出土陶磁器や土師器皿などが挙げられる。このうちSE76、SK54、SP47は中世前半にあたり、SD20、SK16、SP35は中世後半とくに16世紀頃が主体となるようである。その他、擾乱などからの出土遺物には15世紀後半～16世紀にかけてのものがある。ほぼ全面に分布するが、いずれも第2面検出である。

このように見てみると、弥生時代～中世後半までに至る遺構が検出されているとはいえ、その状況には偏りがある。弥生時代は前期後葉頃が最も多く、遺構、遺物ともに多い。その後ブランクがあり終末～古墳時代初頭の遺構が散見されるものの数は少ない。

古墳時代は弥生時代と同じく空白の時期があり、6世紀末～7世紀初頭に至り遺物、遺構が見られはじめる。しかし再び古代には生活の痕跡はなくなり、中世に入るまで空白の時期を迎えることとなる。中世は12世紀後半頃から13世紀頃までと、その後15世紀後半～16世紀頃の、遺構と遺物のピークがある。

つまり、本調査地点では、弥生時代から中世に至るまで継続的に生活が営まれていたのではなく、断続的に集落が形成されたと考えられる。貯蔵穴を中心に生活が営まれた弥生時代前期、大規模な井戸や柱穴などから集落の存在が予想される中世前半、そして大甕が廃棄されていた溝が掘削された中世後半、以上3時期のピークがある。とくに中世に至っては、大規模な井戸や柱穴、溝などの遺構の性格や輸入陶磁器が出土していることなどから、集落でもとくに巨館の存在が推定される。また、本遺跡群の北に位置する上月限遺跡第3次調査地点では、15世紀後半～16世紀代の立花城の出城と推定される堀切が検出されており、第2次調査地点で検出された方形区画と推定される溝とともに山城と里城の関係が示唆されている。今回の調査地点で検出された概期の遺構がこれらとどのような関係を示すものか、本調査では断定はできないものの、今後の周辺調査に期待したい。

## 参考文献

榎本義嗣「上月限遺跡群2―第2次調査報告―」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第633集』2000

榎本義嗣「上月限遺跡群3―第3次調査報告―」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第634集』2000

森田努「14～16世紀の日本出土貿易陶磁の編年」『貿易陶磁研究』No. 2、1982

上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No. 2、1982

小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No. 2、1982



1. I区全景(北から)



2. SD01・SD09・SD08(北から)



1. SD01(東から)



2. SD09(北から)



1. II区南側第1面(西から)



2. II区北側第2面(西から)



1. II区全景(南から)



2. II区北側全景(南から)



1. II区北側包含層第1面  
(北から)



2. II区北側包含層  
第2面(西から)



1. II区北側包含層  
第3面(西から)



2. II区第2面  
(南東から)



1. II区第3面  
(北西から)



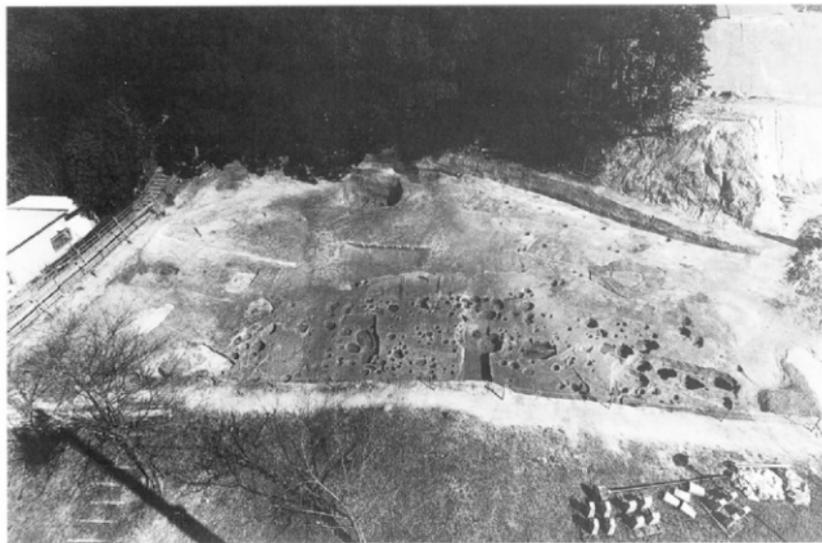
2. II区第4面  
(南東から)



3. II区第5面南側  
(北西から)



1. II区第5面(西から)



2. II区地山面全景(西から)



1. 調査区東壁土層  
(南西から)



2. SK03・SK54・SE76 付近  
(南西から)



3. SK54 付近  
東壁トレンチ土層  
(西から)

1. 包含層土層断面  
(南東から)



2. 包含層土層断面  
(南から)



3. 西壁土層断面  
(東から)

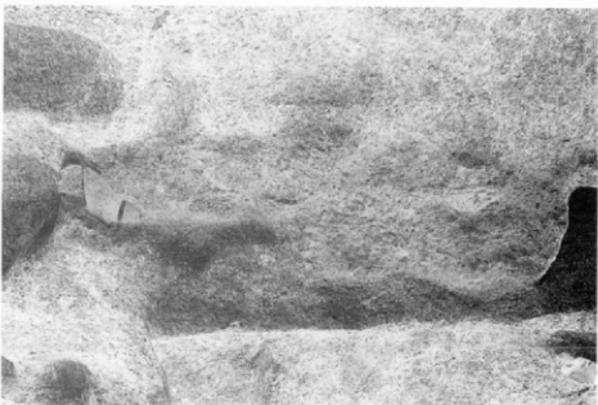




1. SD20 大甕出土状況  
(北から)



2. SD20 大甕出土状況  
(西から)



3. SD20 大甕取り上げ後  
(西から)



1. SD20 完掘状況  
(北から)



2. SD20 北壁土層断面 (南から)



1. SD20 A-A'土層断面  
(北から)



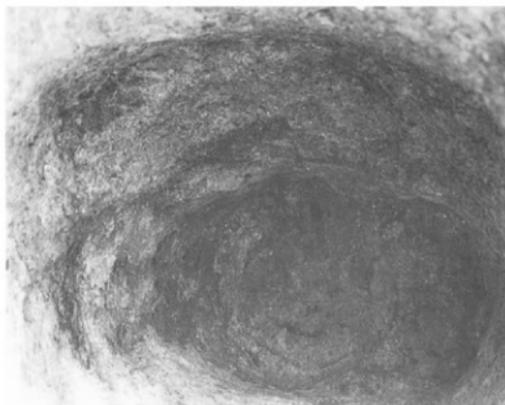
2. SD20 B-B'土層断面  
(南から)



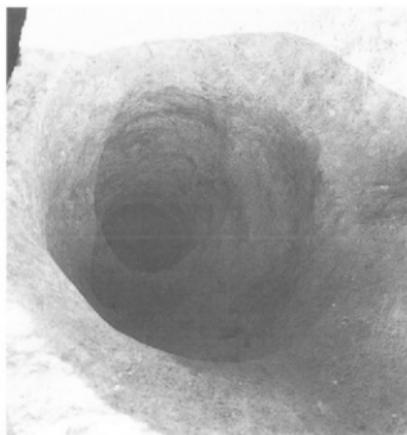
3. SD20 C-C'土層断面  
(南東から)



1. SE76 俯瞰(西上空から)



2. SE76 上層井筒検出状況(北から)



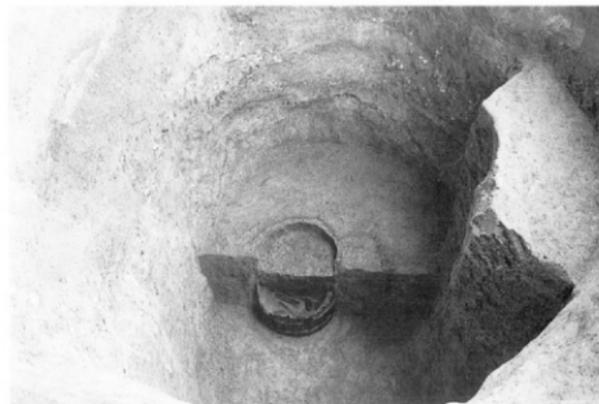
3. SE76 上層井筒掘り下げ状況(西から)



1. SE76 下層井筒検出状況  
(南西から)



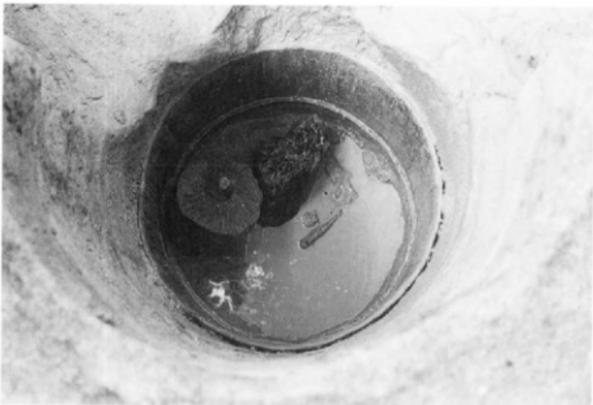
2. SE76 下層井筒  
(西から)



3. SE76 井筒半截状況  
(北から)



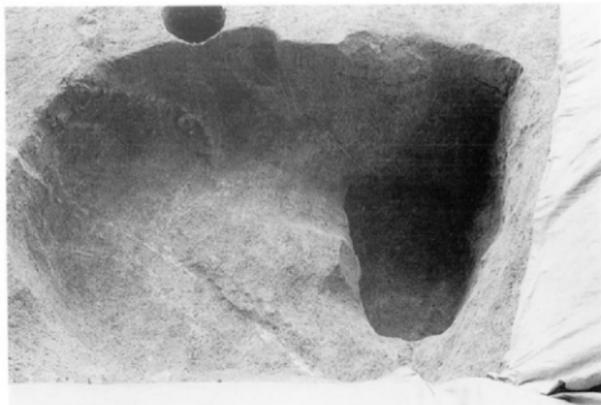
1. SE76 井筒断面  
(北から)



2. SE76 木器出土状況  
(南から)



3. SE76 井筒取り上げ後(北から)



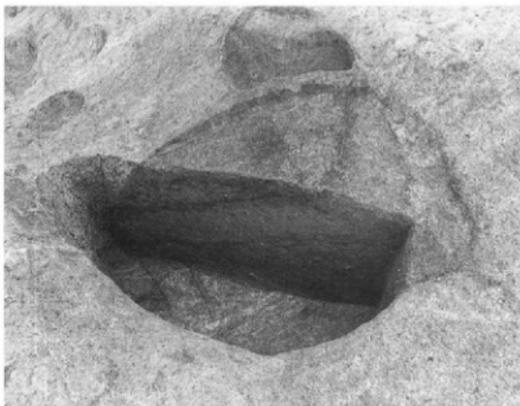
1. SU08 (東から)



2. SU60 土層断面  
(南東から)



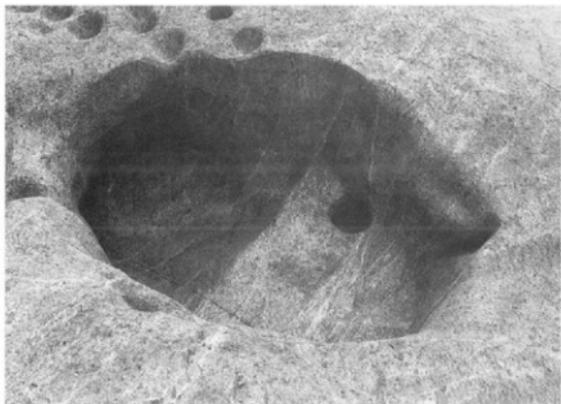
3. SU60 (東から)



1. SU44 土層断面(北から)



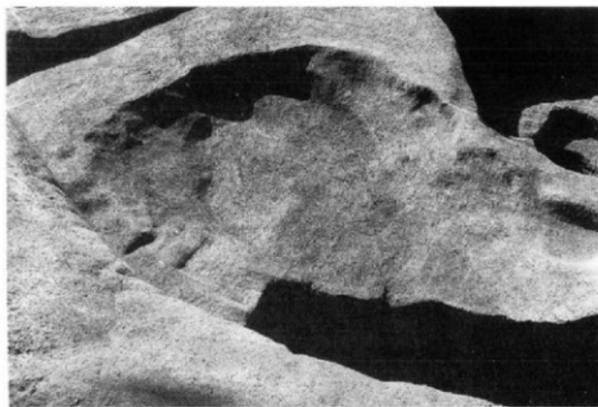
2. SU44 遺物出土状況  
(北東から)



3. SU44 完掘状況(北から)



1. SK54 土層断面  
(北から)



2. SK54 (南東から)



3. SK39 (南から)

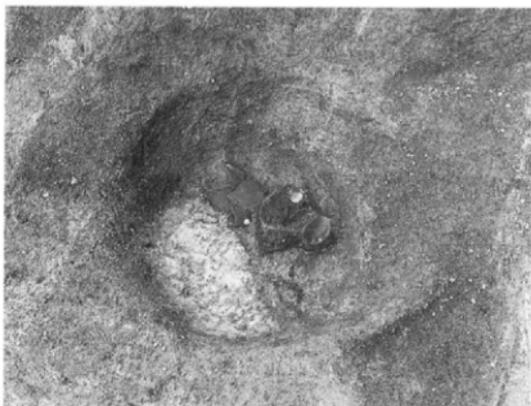
1. SK82 土層断面  
(北西から)



2. SK99 遺物出土状況  
(南東から)

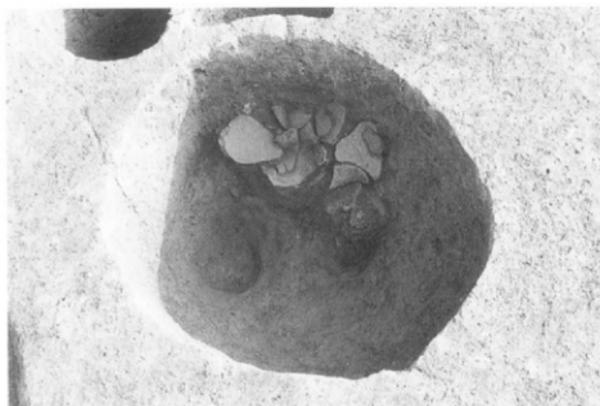


3. SP64(南から)

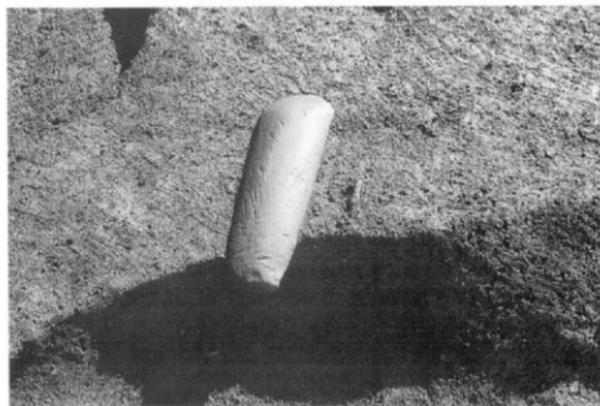




1. SP354(東から)



2. SP339(西から)



3. 石斧出土状況  
(北から)



19-1



19-5



19-2



19-6



19-3



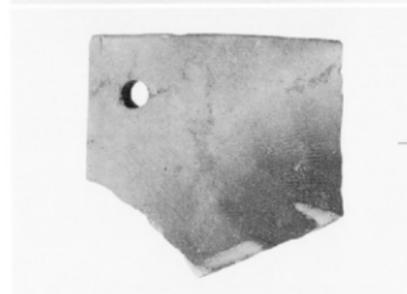
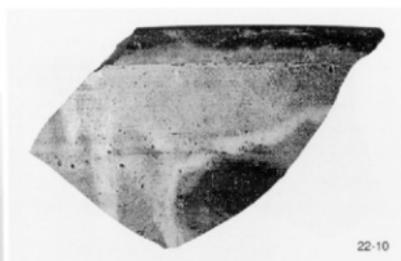
19-7



19-4



19-8





25-13



25-14



25-15



26-16



26-17



SE76 井严桶板材



30-21



27-18



30-22



27-19



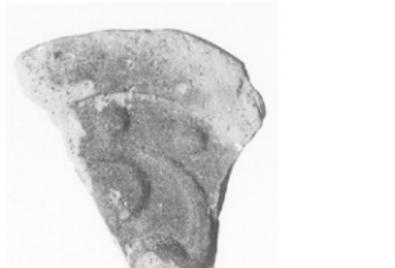
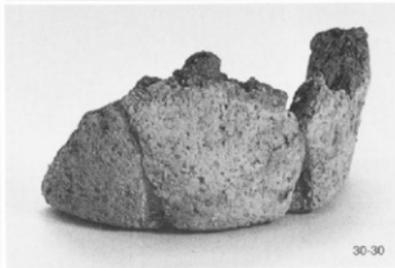
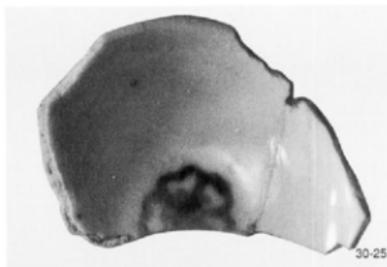
30-23

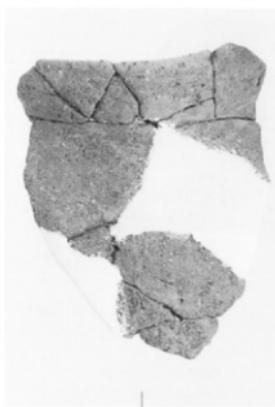


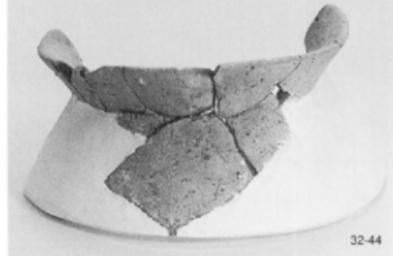
37-20

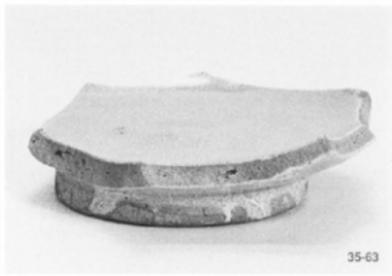


30-24



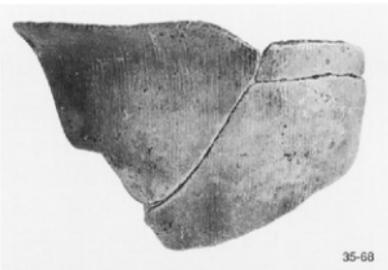




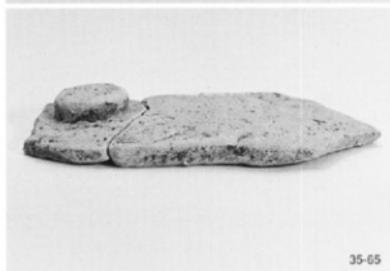




35-64



35-68



35-65



35-69



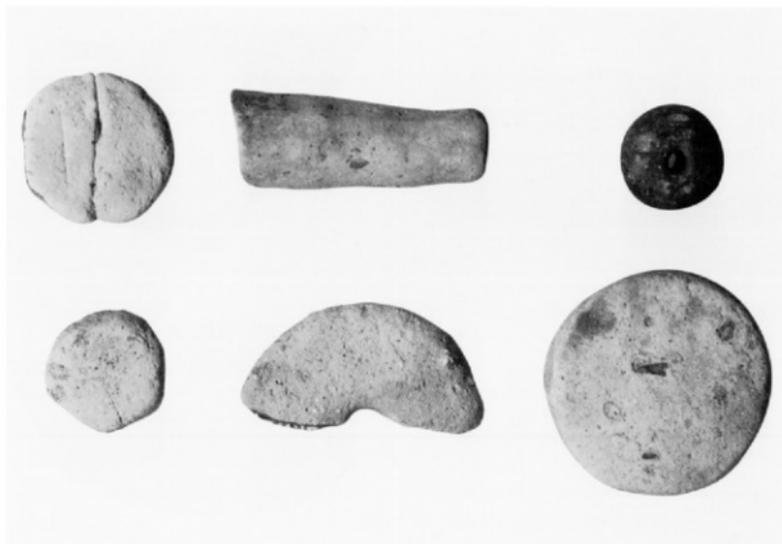
35-66



35-67



35-67



1. 土製品



2. 石鏃

福岡市埋藏文化財調査報告書第 742 集

## 上月隈 B 遺跡

—一般墓道水域下F1井線関係埋藏文化財発掘調査報告書—

2003 年(平成 15 年) 3 月 31 日

発 行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神 1 丁目 8-1

印 刷 有限会社交信社印刷所  
福岡市博多区筑博町 12 番 7 号

